

# 天王遺跡

—第3次発掘調査報告—



天王遺跡A区全景



天王遺跡B区全景

平成10年3月

鈴鹿市教育委員会

# 例 言

1. 本書は、三重県鈴鹿市岸岡町字天王に所在する、「天王遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、三重県労働者住宅生活協同組合の宅地造成工事に伴う事前調査として、同組合の依頼により鈴鹿市教育委員会文化財保護課が実施した。
3. 調査にかかる費用は、三重県労働者住宅生活協同組合が負担した。
4. 発掘調査は、平成9年4月4日から8月11日にかけて実施した。
5. 調査面積は4,980㎡である。
6. 調査の体制は以下のとおりである。  
調査主体 鈴鹿市教育委員会  
調査担当 鈴鹿市教育委員会 林銀哉（文化財保護課課長）  
中森成行（文化財保護課課長補佐）  
村山邦彦（博物館準備室室長）  
杉立正徳・藤原秀樹・新田剛・岡田雅幸  
遺物整理 片岡貴美子・加城陽子・神田梢、杉本恭子・真鈴川千津子
7. 現地調査は主として杉立が担当し、藤原が補佐した。
8. 現地調査並びに報告書作成にあたって、以下の方々・組織の御指導・協力を賜った。記して感謝の意を表したい。  
八賀晋(三重大学人文学部教授)、山中敏史(奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落研究室長)、尾野善裕(京都国立博物館学芸員)、辻公則(仏教大学学生)、三重県埋蔵文化財センター、株式会社長工、株式会社ジェクト、有限会社練木建材、株式会社古環境研究所、鈴鹿市シルバー人材センター
9. 本書で報告した遺跡の位置は国土座標第VI系に基づく。挿図中の方位は座標北である。
10. 本書における土層の色調は『新版標準土色帳』による。
11. 遺構番号は遺構の性格を示す記号の後ろに発見順に番号を与えた。百番台には調査次を示す3を付けた。  
SB：掘立柱建物 SD：溝 SK：土坑 SE：井戸 ST：竪穴住居 SX：その他
12. 本書の執筆・編集は藤原が行った。図版の整理に際しては吉田真由美・林和範の協力を得た。
13. 本書で報告した記録及び遺物は、平成10年秋開館予定の鈴鹿市考古博物館（鈴鹿市国分町224）で管理・保管する予定である。

# 目 次

## 例言

## 目次

1. 周辺の環境	1
2. 調査の経緯と経過	2
3. 調査の成果	
A区の調査	3
B区の調査	18
その他の出土遺物	24
4. 調査のまとめ	25
English Summary	26
報告書抄録	29

# 1. 周辺の環境

天王遺跡①は三重県鈴鹿市岸岡町天王を中心として字地主・山田の一部にかけて所在する。西辺400m、南辺300mに挟まれた直角三角形の範囲に古墳時代から奈良・平安時代にわたる遺物の散布がみられる。

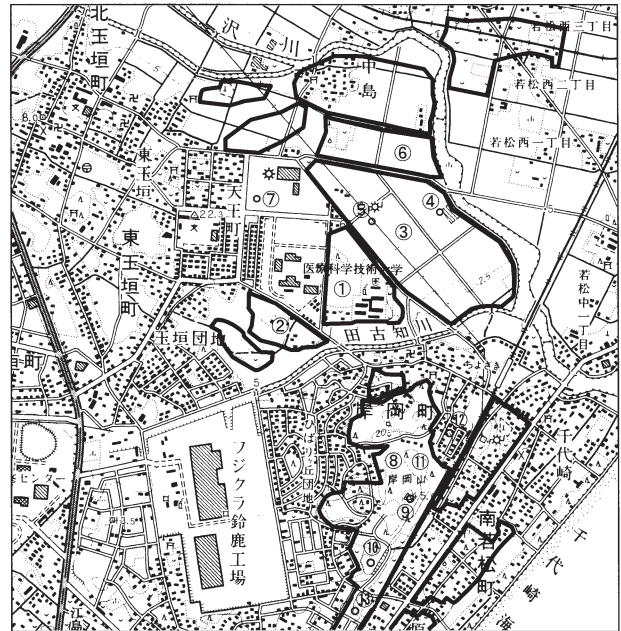
地質的に見ると、この場所は鈴鹿川右岸に形成された段丘がちょうど海岸平野に埋没していく先端部に当たる。北側を金沢川、南側を田古知川に挟まれ、東側には伊勢湾の海岸平野の水田地帯が広がっていて、標高5m前後の半島状の微高地である。

天王遺跡では、東端で平成8年に病院の改築(1次)と道路の改良(2次)に伴う発掘調査が行われている。第1次調査では律令期の掘立柱建物2棟、井戸、溝が検出され、2次調査でも同様に掘立柱建物1棟、井戸1基と弥生時代末から古墳時代にかけての井戸1基も検出されている。特に、建物柱穴から出土した知多式製塩土器は伊勢湾を隔てた交流を物語るものとして注目されている。

天王遺跡の南西側には天王屋敷遺跡②が所在する。戦時中に軍需工場の建設に伴い大部分が破壊されたが、その際大量の瓦や加工された石が出土したと伝えられている。白鳳時代の寺院遺跡であった可能性が高く、天王遺跡の性格を考える上で極めて重要な遺跡といえる。

天王遺跡東側の金沢川沿いの沖積平野にも、金沢川遺跡③・塚越1号墳④・3号墳⑤・双ッ塚遺跡⑥が分布している。塚越1号墳はかつて破壊された際、画文帯神鏡・四神四獣鏡・振文鏡と多数の勾玉・管玉を出土した。双ッ塚遺跡からは弥生時代末～古墳時代の竪穴住居や平安時代の掘立柱建物が検出されている。塚越古墳群では2号墳⑦が唯一残存している。

多古知川を挟んだ南側には独立丘陵「岸岡山」が立地している。丘陵のほぼ全域に弥生時代後期～古墳時代の集落遺跡岸岡山Ⅲ遺跡⑧が分布している。本調査と平行



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1/30,000)

して進められた発掘調査では、弥生時代後期の33棟の竪穴住居が検出されている。

また、丘陵全域と東側の浜堤上には岸岡山21号⑨・22号⑩の前方後円墳を含む40基あまりの岸岡山古墳群⑪が分布している。また、須恵器窯跡1基・⑬も確認されている。22号墳は試掘調査により5世紀後半の、21号墳は採集遺物から6世紀前半の築造と考えられている。2・3号墳⑫はいずれも丘陵頂部に築かれた木棺直葬の円墳で、木棺直葬の主体部から鉄刀や須恵器類が出土している。多くの古墳は5世紀後半から6世紀代にかけて築かれ、この一体を支配し後に白鳳寺院を建立した氏族たちの奥津城とみられる。



写真1 A調査区全景(南から)

## 2. 調査の経緯と経過

調査地は、鈴鹿医療技術大学と鈴鹿厚生病院に挟まれた水田である。平成8年、この一角8,643㎡を造成し33区画の宅地とする計画が、三重県労働者住宅生活協同組合から鈴鹿市開発審査会に提出された。

該当地は周知の遺跡「天王遺跡」の範囲内であるため、事業者の協力を得て試掘調査を平成8年11月18日に実施した。その結果、開発地の南側水田部分の東半分で、水田耕土直下に柱穴、溝などの遺構が検出され、北側の畑地では多数の遺物の包含が確認された。

この結果を基に、遺跡の保護に関する協議が繰り返された。最終的に表土が薄く重機の移動によっても遺構が破壊される可能性が高く、保存は困難と判断された。遺構が確認された約3,500㎡の発掘調査を行い記録保存とすること、調査費用は原因者である三重県労働者住宅生活協同組合が負担することで合意した。

調査区は南半の水田地区をA区、北半の畑として利用されている高まりをB区とし調査区を設定した。4月9日からはA区の表土除去と平行して作業員を投入して遺構検出・掘削を始めた。A区は全体に著しく削平を受けていて、重機で耕作土を除去すると遺構がすぐ姿を現す状況であった。そのため、比較的調査は簡単に進むと予想されていた。ところが、表土の除去を始めるとA・B区間の、すでに削平を受けたと判断した部分にも、大規模な掘立柱建物群が残存することが確認された。このため、調査区を大幅に変更・拡張せざるを得なかった。

調査期間の前半は、極めて天候が悪く降雨が続いた。

度重なる冠水により作業は著しく遅延した。また、例年にない初夏の台風の連続接近により航空写真撮影も何度も延期されるなど天候に振り回された発掘であった。

運河状の大溝と独特の配置を持つ大形掘立柱建物群というA区遺構の特性が明らかになったため、6月12日に中間発表の形で成果を新聞発表し、現地説明会を6月22日に開催して約60名の参加者を得た。

B区の方は、A区の進行に合わせ6月10日から表土除去を開始した。先に述べたようにB地点の畑の高まりを本来の地形と考え調査に入った、ところが、表土除去を開始した段階で予想は見事に崩れた。B区の高まりは周囲の水田を開削した際の排土を寄せて生じたものであった。それゆえ、地下遺構の遺存状況はA区と比較して良好であったが、1mを越える表土の処分にてこずり、やむなくA区の遺構が確認されなかった部分を埋め戻す形で排土置場とすることで対処した。

このため、B区への作業員投入は大幅に遅れた6月26日からとなった。しかし、ようやく回復してきた天候と、透水性のよい基盤層に恵まれ、調査は急速に進展して8月4日には第2回目の航空写真測量を終えすべての調査を終了することができた。

今回の調査では、事前の試掘調査が不十分で、調査計画の策定や積算に甘さがあった。そのことが、調査の運営に大きな障害を招いたことを痛感し、反省点が多かった。しかし、事業者におかれては、たびたびの調査方針の変更に対し寛大な態度で望んでいただき、無事に調査を終えることができた。記して感謝の意を表する次第である。



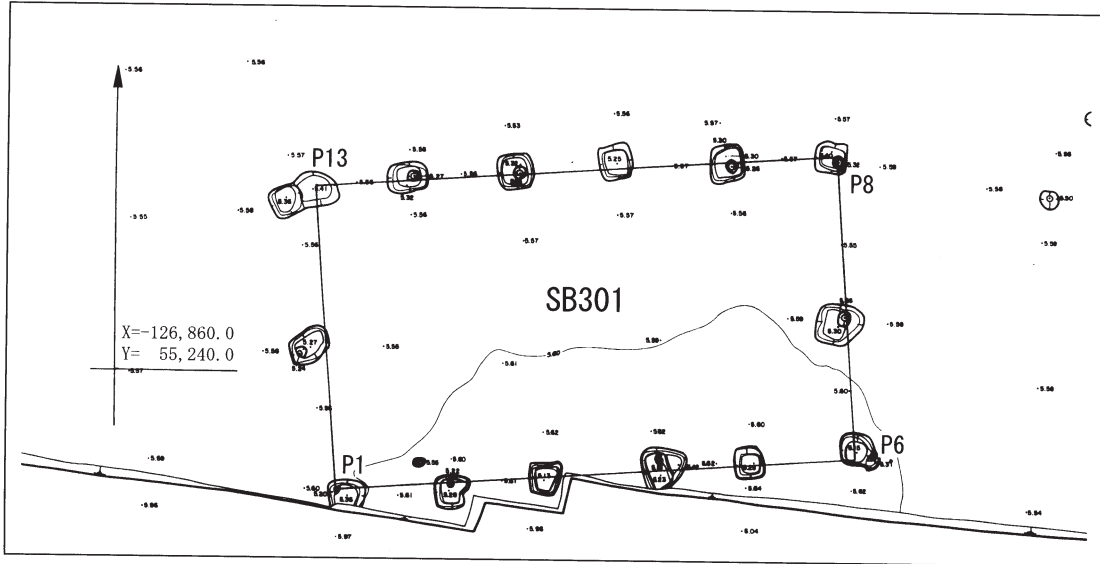
第2図 調査区配置図(1:5,000)

### 3. 調査の成果

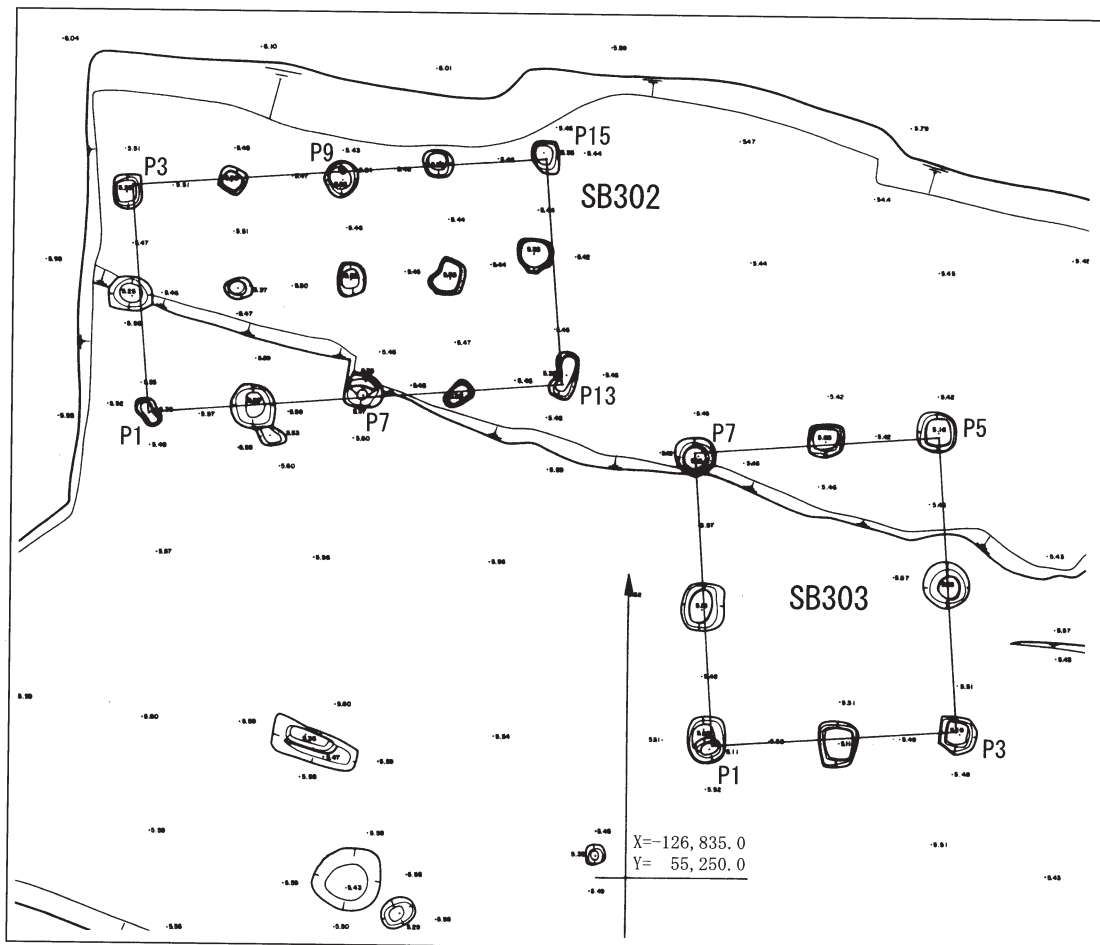
#### A区の調査

A区は水田造成のため著しく削平を受けており、耕作土・床土を除去すると遺構検出の対象となる基盤層に

たる。基盤層は緑灰色のシルト質粘土であり、近代に互用粘土が採掘された坑が各所にみられる。基本的にこのシルト質粘土層は東側に向かって傾斜しており。北東側では上に乗る粗砂からなる固結した砂礫層が現れる。



第3図 SB301実測図(1/120)



第4図 SB302・303実測図(1/120)

## 主な遺構とその遺物

### 掘立柱建物

SB301 5間×2間の東西棟(N85°E)の建物である。規模は8.5m×5mで、柱間や柱の並びにかなりのばらつきがみられる。



写真2 SB301(東から)

SB302 粘土採取坑のためにかかなり攪乱され、遺存状況は良くない。SB301から北に29.5m離れて並列し、東妻のラインが揃えられている。4間×2間の総柱の建物で倉庫の可能性もある。規模は7m×3.6~3.8mでやや不均斉だが柱間は6尺とみられる。



写真3 SB302(東から)

SB303 SB302の南東に2.5m離れて建つ、2間×2間の東西棟の建物である。主軸がN86°Eと微妙に他の2棟とは異なる。規模は4.8m×4.2mで、柱間は桁行8尺、梁行7尺である。



写真4 SB303(北から)

SB305 東柱を持つ2間×2間の南北棟(N21°W)の倉庫である。規模は3.3m×3mで、柱間は桁行5.5尺と梁行5尺である。



写真5 SB305(北から)

SB307 B305から7.6m北に離れて、東側を揃えて直列している。3間×2間の南北棟で、東柱を持ち倉庫とみられる。規模は3.8m×3.3mで、柱間桁行5.5尺、梁行5尺とみられるが不均斉である。

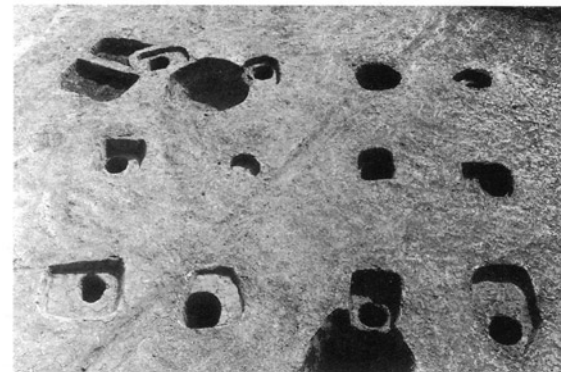


写真6 SB307(東から)

SB315 SB307から東に16.3m離れて建つ。SB307の北妻の延長線が南側と一致する。一部が削平されているものの東柱を持ち、2間×2間、一辺3mの正方形の倉庫である。柱間は5尺である。柱穴p06がSB309の柱穴p12に切られ、より古い。

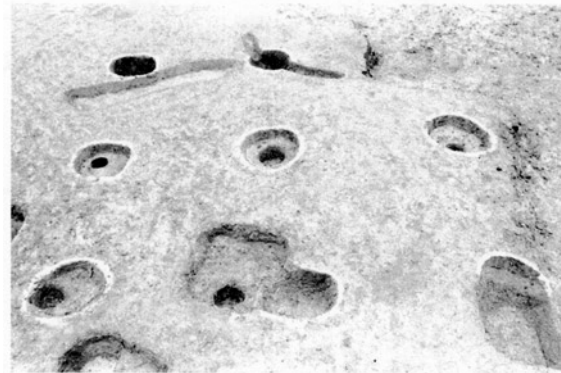


写真7 SB315(東から)

SB308 主軸がN62°Eとかかなり振るものの他の建物群とは様相が異なること、SB307・SB315間に位置し、各々からの間隔が6.7m・3.3mと意味がありそうであることから、同グループと考えている。4間×2間の東西棟で、規模は6.4m×3mで柱間は桁行が5尺、梁行が5.5尺の可能性が高いが、ばらつきがある。



写真8 SB308(西から)

SB304 大型の掘立柱建物群の中では最も南に位置する、5間×2間の南北棟(N14°E)の建物である。一部に間仕切りと見られるピットが検出され、規模は9.6m×4.2mを測る。梁行は柱間7尺、桁行側は北端の1間が7尺で他は6尺等間である。柱痕も明瞭で3基の柱痕に柱材が遺存していた。

出土遺物 須恵器高坏(62)はp3から出土。



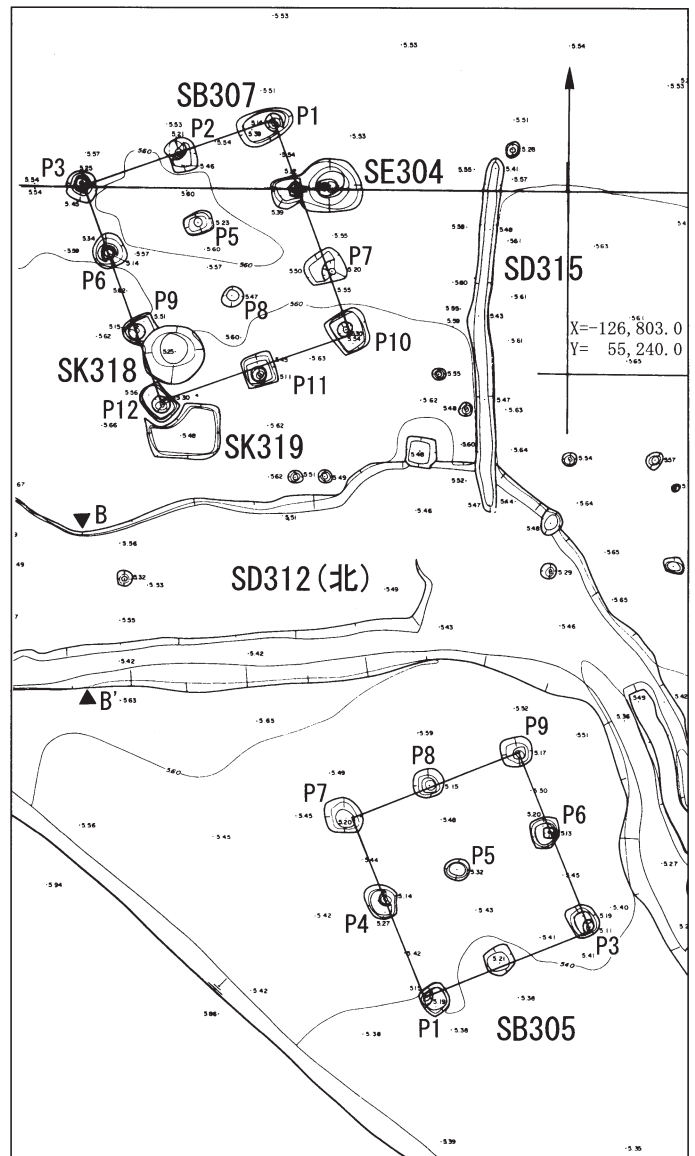
写真9 SB304(北から)

SB306 SB304の北側に1.8~2.4mと柱間1間分を隔て直列する8間×2間という長大な南北棟(N17.5°E)の建物である。規模は15.6m×4.6mで、柱間は桁行がやや不均斉ではあるものの6.5尺、梁行が7.5尺とみられる。主軸がSB304と微妙にずれるのは両者が西側を流れる溝SD305・SD312に規制されているためと考えられる。北側はかなり削平されていたが、柱痕も明瞭で4基の柱痕から柱材が検出された。

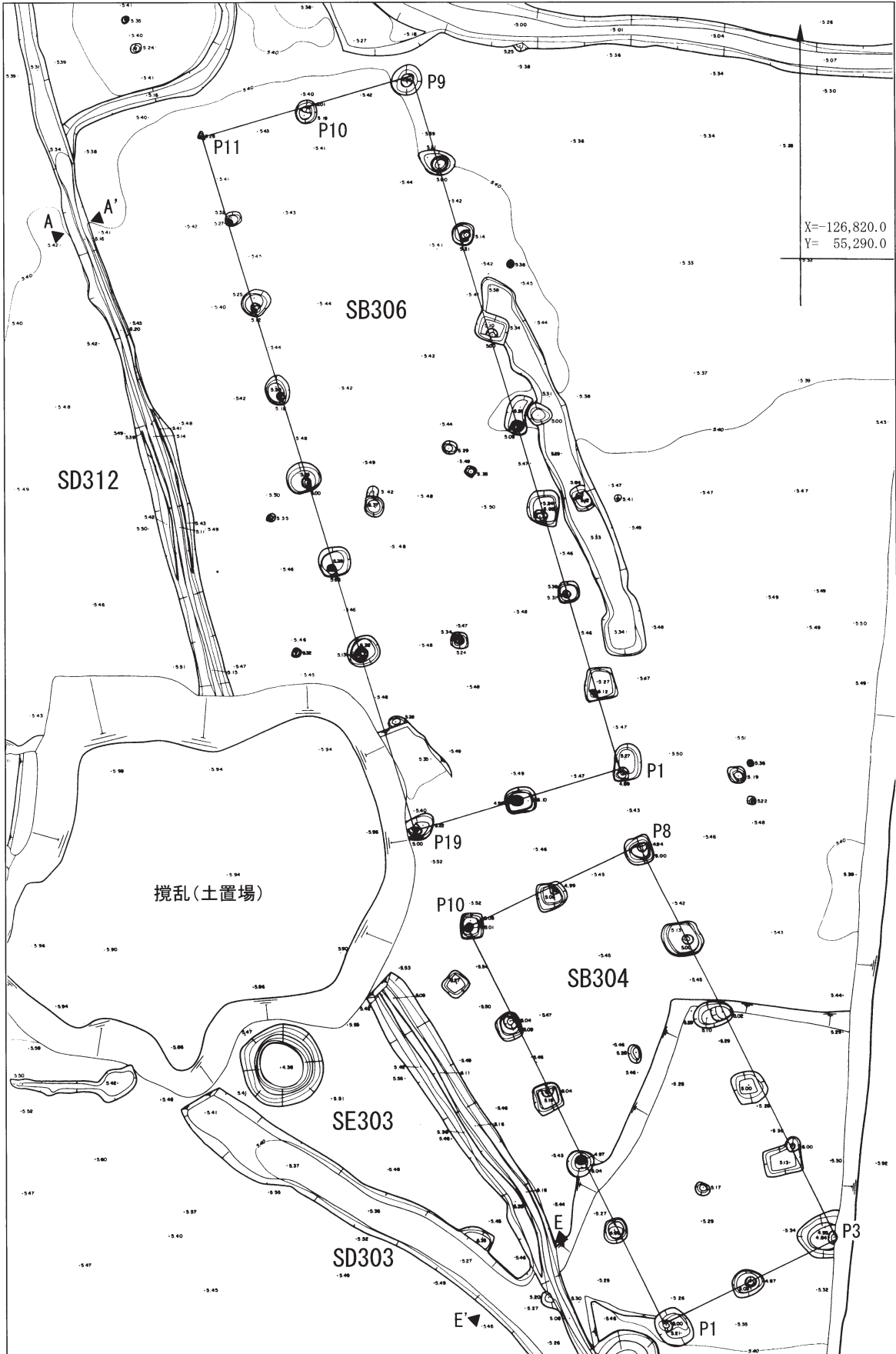
出土遺物 須恵器無台坏身(63)はp10出土。土師器坏(64)はp19出土。口縁部が被熱により黒変。



写真10 SB306(北から)



第5図 SB305・307実測図(1/120)



第 6 図 SB304-306実測図(1/120)



**SB309** 以下のSB309～SB314は、官衙的な「コ」の字形配置をとる特徴的な建物群である。規模からみてSB313・SB314が東面する正殿、他が南・北脇殿に該当する。SB309は5間×2間の東西棟（N78°E）で、梁行が6.5尺、桁行は6.5または7尺が用いられたとみられるが、不均斉である。いずれも柱痕がよく残り、特に西側の柱穴の掘方埋土では大量の炭・焼土を含むものがある。出土遺物 須恵器坏蓋（65）（66）はいずれもp13出土。扁平な宝珠つまみを持つ蓋。

**SB310** SB309と同一箇所建てられた4間×2間のほぼ正方位の東西棟（N89°E）の建物である。規模は8.3m×3.9mで、梁行の柱間は6.5尺、桁行は7尺が用いられている。柱痕はいずれもよく残っており、掘方埋土には炭化物がほとんど含まれないのに対し、多くの柱痕には炭化物が大量に含まれている。

**SB311** 南脇殿に当たる、6間×2間の東西棟（N86°E）の建物である。規模は11m×4.6mで、柱間は梁行7.5尺、桁行は6尺とみられる。柱穴p8・3・14がSB312の柱穴p6・12・13を切っている。全体としてかなり削平を受

けているが、北側の柱穴掘方の埋土に炭化物が多く混入している。

**SB312** SB311と重複して建っている、5間×2間の東西棟（N81°E）の建物である。規模は8.5m×3.8mで、柱間は梁行が6.5尺であるが、桁行はかなり不均斉である。削平を受けていることもあり柱穴の埋土・柱痕には特に炭などの混入はみられない。



写真12 SB311・312(西から)



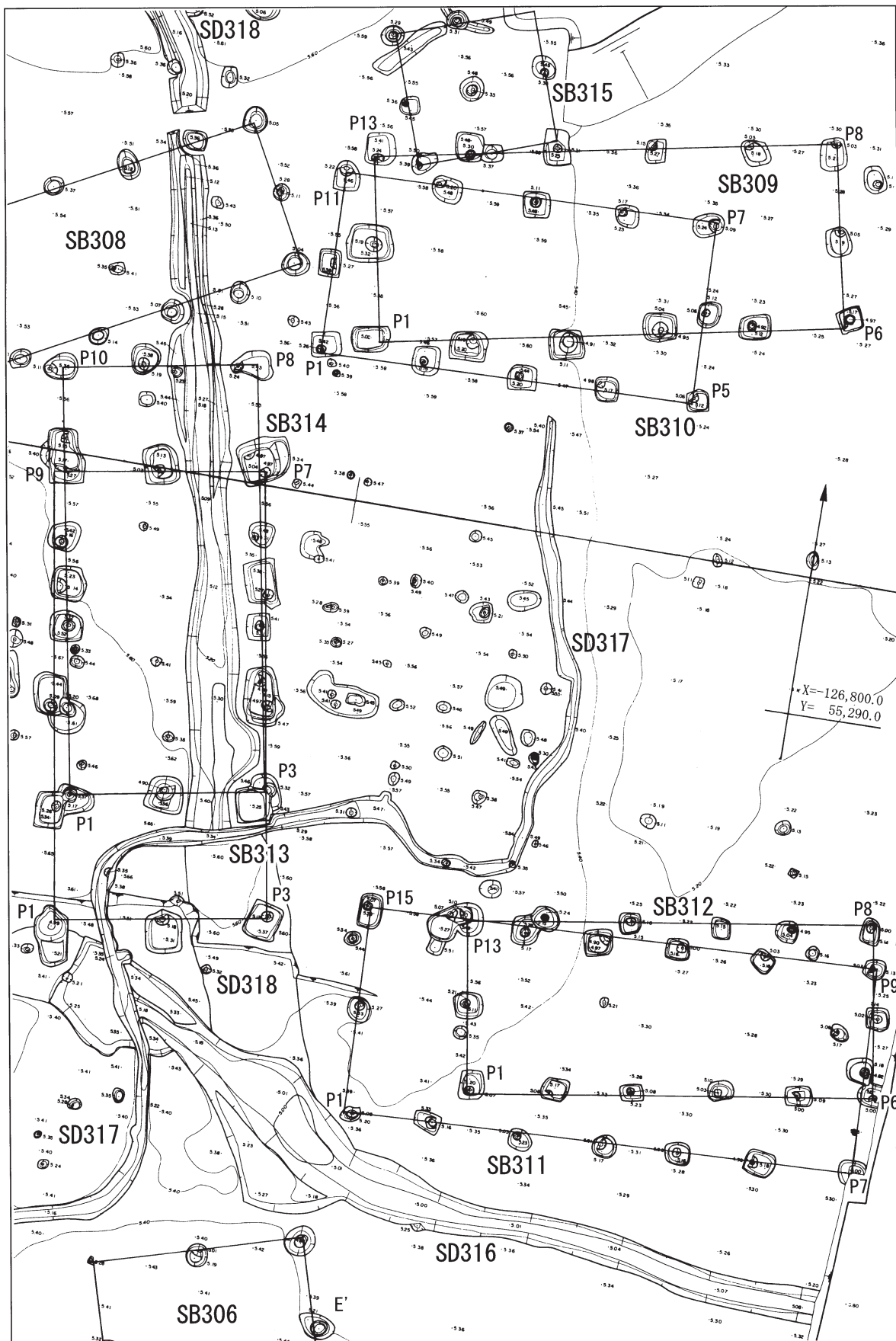
写真11 SB309・310(西から)



写真13 SB309～312(南から)



写真14 SB309～314(垂直)



第7図 SB309~315実測図(1/120)



写真 15 SB313・314(北から)

**SB313** 一辺0.8~1.0mと最も大きな柱穴掘方を持つ中心的な建物である。4間×2間の南北棟(N10°W)である。SD318を切って建てられている。規模は9.6m×4.5mで、柱間は梁行が8尺、桁行が7.5尺とみられるが、掘方の規模の割に並びも柱間も均斉ではない。柱穴p4・5・7・9・11・12がSB314のそれぞれ柱穴p3・4・7・11・14・1を切る。柱掘方埋土にはいずれも大量の炭・焼土・土器類を含んでいる。

出土遺物 須恵器坏蓋(67)はp2出土。端部内面に小さなかえりを持つ。坏蓋(68)はp1出土。甕(70)はp4出土。胎土が緻密。土師器皿(68)・土師器甕(71)はp1出土。

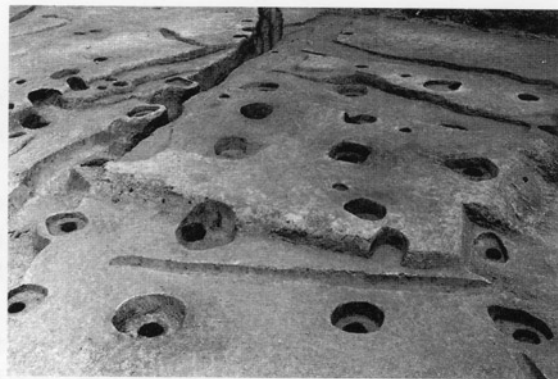


写真 16 SB316(東から)

**SB314** SB313と重複して建っている。SB313とは微妙に主軸がずれる。5間×2間の南北棟(N9°W)の建物である。規模は9.2m×4.2mで、柱間は梁行が7尺、桁行は基本的に6尺とみられるが不均斉である。柱穴掘方埋土には焼土はみられず、柱痕には一部炭・焼土を含むものがある。またp8・12では須恵器甕の大型破片を礎盤として利用している。

出土遺物 須恵器坏蓋(72)はp12出土。端部内面に小さなかえりが付く。坏蓋(73)はp3出土。坏(74)はp12出土。高台は高くやや外傾する。

**SB316** SB314の北8mに所在する。SD318を切って建てられている。4間×3間の総柱の南北棟(N14°W)の建物である。規模は7.1m×5.6mで、柱間は6尺と推定されるが不均斉で、特に床束の桁方向の通りが悪い。柱掘方の埋土には焼土等は含まれないのに対し、柱痕には炭化物が多量に含まれる。



写真 17 SB305・307~314(西から)

## その他の遺構 溝

SD301 調査区の南東コーナーで検出された最大幅4.7m、検出面からの深さ1m、検出された延長14mを測る大溝である。走向はN47°Eであるが、完全な直線ではなく南東側に中心をおく大きな弧状ともみられる。基盤層の黄色粘質土を掘り抜き、基底が灰白色砂礫層に達した面を底面としている。層序は上層が灰白色粘質土①で古墳時代から中世の山茶碗までを含む。中層が赤褐色粘質土②、下層1層③は灰白色粘質土で古墳時代から奈良時代の遺物が混在する、下層2層④が黒色粘質土層で完形に近い古墳時代遺物のみを多く含む。それ以下は掘削直後に堆積したとみられる側壁の崩落した青灰白・灰白色粘土⑩、⑪となる。かなり垂直に掘り込まれているが護岸を示すような杭やピットはこの範囲では検出できなかった。

出土遺物 滑石製紡錘車(1)は上面には内側に1重の圏線、7個の鋸歯文が施されるが、鋸歯文の割り付けは雑で連続していない。底面は大部分が剥落し、わずかに鋸歯文の痕跡が残る。著しく摩耗していて使用されていたことがうかがえる。

須恵器坏蓋(2)～(5)は下層出土。天井部と口縁部との間の稜を痕跡的に留め、天井部は1/2～2/3ヘラケズリ調整が施されるなど古風な様相を留める岸岡山窯に特有の蓋坏。(6)も下層出土。通有のタイプ。坏身(7)～(9)は下層の出土。受け部が退化し、立ち上がりが外に膨らみながら内傾する。底部外面のヘラケズリ調整は2/3に施される。これも岸岡山窯に特有のタイプ。坏身(10)は中層の出土。通有のタイプ。坏蓋(11)～(13)はいずれも中層出土。扁平な宝珠つまみを持ち、内面のかえりを持たない蓋。坏(14)は中・上層にまたがった出土。無高台で口縁が大

きく開く。有高台坏(15)は中層出土。底部は高台端より下に張り出す。坏(16)は中層出土。

脚付短頸壺(17)は中層出土。扁平で丸みを持つ体部と、あまり径の変わらない口縁部をもつ。口縁部の立ち上がりは垂直で短い。岸岡山窯特有とされる器種。(18)は下層出土。

有蓋高坏(19)は下層出土。短脚で、大きく焼け歪んでいる。有蓋高坏(20)は中層の出土。短脚。(21)は中層出土。長脚二段透かしで三方に透かし穴を持つ。(22)も中層の出土。岸岡山窯タイプの坏身を坏部とする。長脚二段透かしで三方に透かし穴を持つが、上段の透かしは貫通しているものの、全く塞がっている。

壺蓋(23)は中層出土。口径は小さく、口縁部が高い。口縁に別個体の口縁部片が融着。

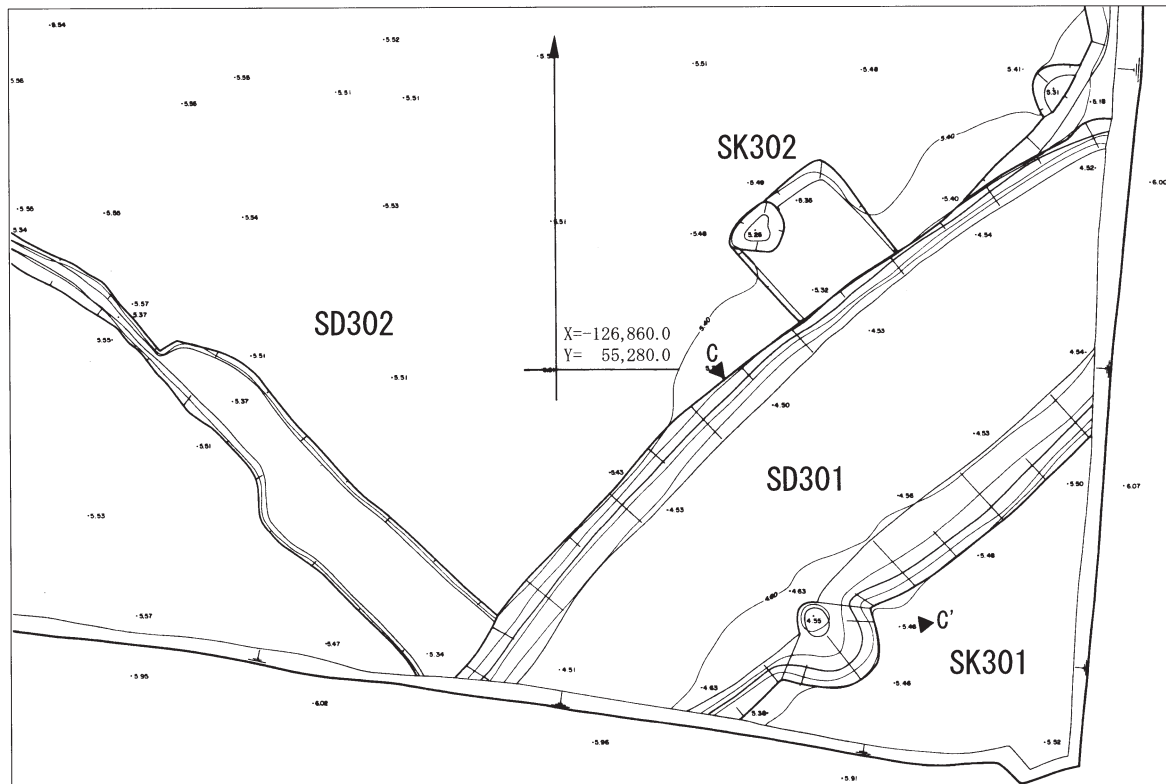
短頸壺(24)(25)(27)はいずれも中層出土。肩部と胴部の稜が比較的明確。短頸壺(26)は崩壊したセクションから出土のため層位不明。胴部は全体的に丸みを持つ。

鉢(28)は下層出土。金属器を模したと見られるシャープな作りだが、大きく歪む。捏鉢(29)は上層と中層にまたがり出土。外面はカキメ調整、底部に刺突は無い。

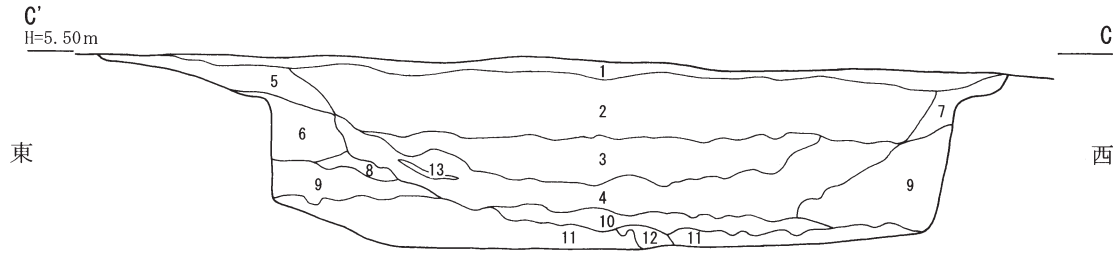
筒形器台(30)は中層出土。筒状部のみで逆三角形の透かしを3方にあける。脚部(31)は下層から中層にまたがって出土。器台または台付壺とみられる。外面にハケメと3条の沈線を施す。もう1個体と見られる同様の破片が出土し、それには楕円形の透かし穴がつけられる。

甕(75)は中層でつぶれた状態で出土。カキメ調整が丁寧。甕(76)は下層で同様につぶれた状態で出土。

その他中層から平瓦が出土している。焼成は須恵質で堅い、端部の面取りはシャープで、上面には布目痕。下面は横方向のケズリ調整が施される。



第8図 SD301実測図(1/120)



第9図 SD301断面図(1/40)

- |                       |                             |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1. 灰白色粘質土. 5YR4/1(上層) | 8. 黄灰色粘質土. 2.5Y5/1          |
| 2. 赤褐色粘質土. 5YR4/8(中層) | 9. 褐灰色粘質土. 10YR4/1レキを多く含む   |
| 3. 灰白色粘質土. 5Y4/1(下層①) | 10. 青灰白色粘土. 5B5/1           |
| 4. 黒色粘土. 5Y2/1(下層②)   | 11. 灰白色粘質土. 5Y8/1粗砂・レキを多く含む |
| 5. 黄色粘質土. 2.5Y7/8     | 12. 灰白色粘質土. 5Y7/1           |
| 6. 黄灰色粘質土. 2.5Y6/1    | 13. 炭化物                     |
| 7. 黄灰色粘質土. 2.5Y4/1    | 地山 溝底 灰白色砂レキ土. 5Y7/1        |
|                       | 上層 黄色粘質土. 5Y8/9             |



写真18 SD301(北から)

**SD303** SD301に流入する溝で、SD305を切って掘られている。幅95cm、検出面からの深さ25cmを測る。北西方向に20mほど延びるが、近代の粘土採掘坑で切断されそれより先は検出できない。採掘坑の反対側に位置する井戸状の土坑SK311があるので、ここから派生したものとも考えられる。

出土遺物 須恵器坏(41)底面に火襷痕が見られる。

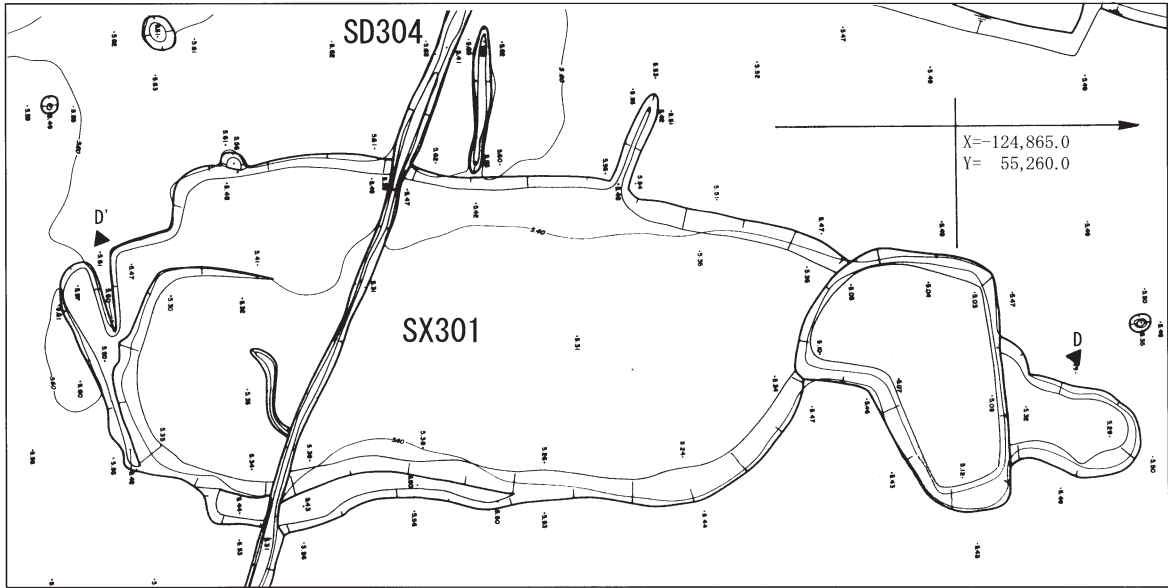
**SD304** SD301に流入する溝である。SD301から約7.5mは1.5~1.2mと幅広の部分 (SD302) がありそれを切るかたちで幅約50cmのSD304が流れる。SD304はさらに2.5mほど北西に延びた後、西北西に向きを変え緩やかなカーブを描き徐々に細くなりながら約35m延びた地点で90°北に折れるが、削平のため消えている。途中で土坑群SX01に切られる。深さは西側で5cm前後、SD301付近で15cm程度である。埋土は黒色粘質土。

**SD312** SD301に流入する溝である。途中で粘土採掘土坑に切られている。SD301から25mほど北西に延び、近代

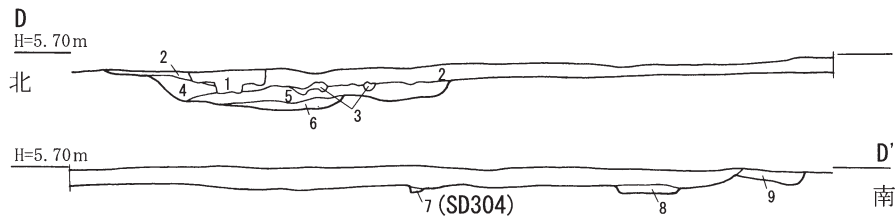
の採掘土坑で切られている部分迄をSD305とした。粘土採掘坑から北北西に向きを変えさらに27m延びた地点で110°西に折れて調査区外に至るこの部分までをSD312、屈折部より西をSD312(北)として遺物の取上げを行った。SD305の部分で幅約30cm、深さ40cm、SD312では深さ20~10cmを測る。部分的に掘り直しにより二重になっている部分もみられる。SD312(北)の部分では、焼土・炭・土器片が大量に投棄され埋められていた。その後、雨水が溝を広げ自然流路状となり、幅3mほどの幅に広がる。

出土遺物 須恵器坏蓋(42)はSD301近くで出土。須恵器無台坏(43)、土師器坏(44)(45)はSD305部分出土。土師器坏(46)~(49)、甕(50)はSD312部分出土。土師器坏の胎土は良好で薄手である。

**SD314** SD312から東に8m離れて幅80cm、深さ15cm、延長約9m検出された痕跡状の溝である。SB306のp6に切られている。

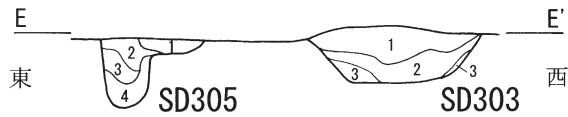


第10図 SX301実測図(1/120)



- |                               |                            |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1. 攪乱                         | 6. 黒色粘質土. 5Y2/1強粘質         |
| 2. 黒褐色粘質土. 10YR3/2有機質含む       | 7. 黒色粘質土. 2.5Y2/1(SD304埋土) |
| 3. 明黄褐色粘質土. 10YR6/8           | 8. 黒色粘質土. 10YR2/2地山土ブロック含む |
| 4. 黒色粘質土. 2.5Y2/1地山土ブロック含む    | 9. 青黒色粘質土. 5BG1.7/1炭化物含む   |
| 5. 黒褐色粘質土. 10YR3/1灰白色粘土ブロック含む | 地山 黄色粘質土. 2.5Y8/8          |

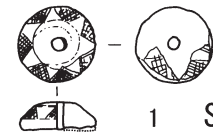
第11図 SX301断面図(1/40)



- SD305
1. 黄灰色粘質土. 2.5Y5/1
  2. 黄灰色粘質土. 2.5Y6/1 上層
  3. 灰白色粘質土. 10YR7/1
  4. 褐灰色粘土. 10YR5/1 下層

- SD303
1. 灰黄褐色粘質土. 10YR4/2
  2. 褐灰色粘質土. 10YR4/1
  3. 褐灰色粘質土. 10YR4/1砂レキ・地山土含む
  - 地山 黄色粘質土. 2.5Y8/8

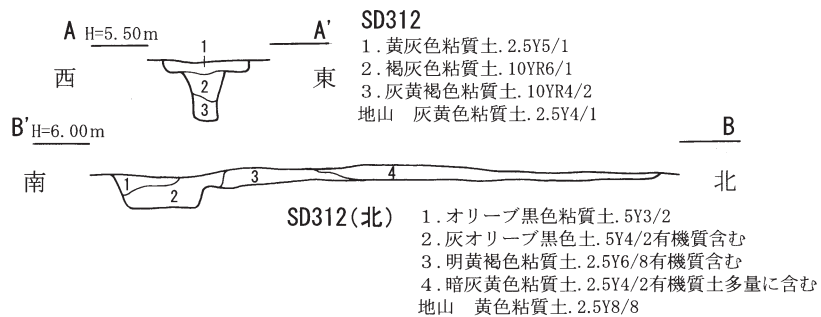
第12図 SD303・305断面図(1/40)



1 SD301出土



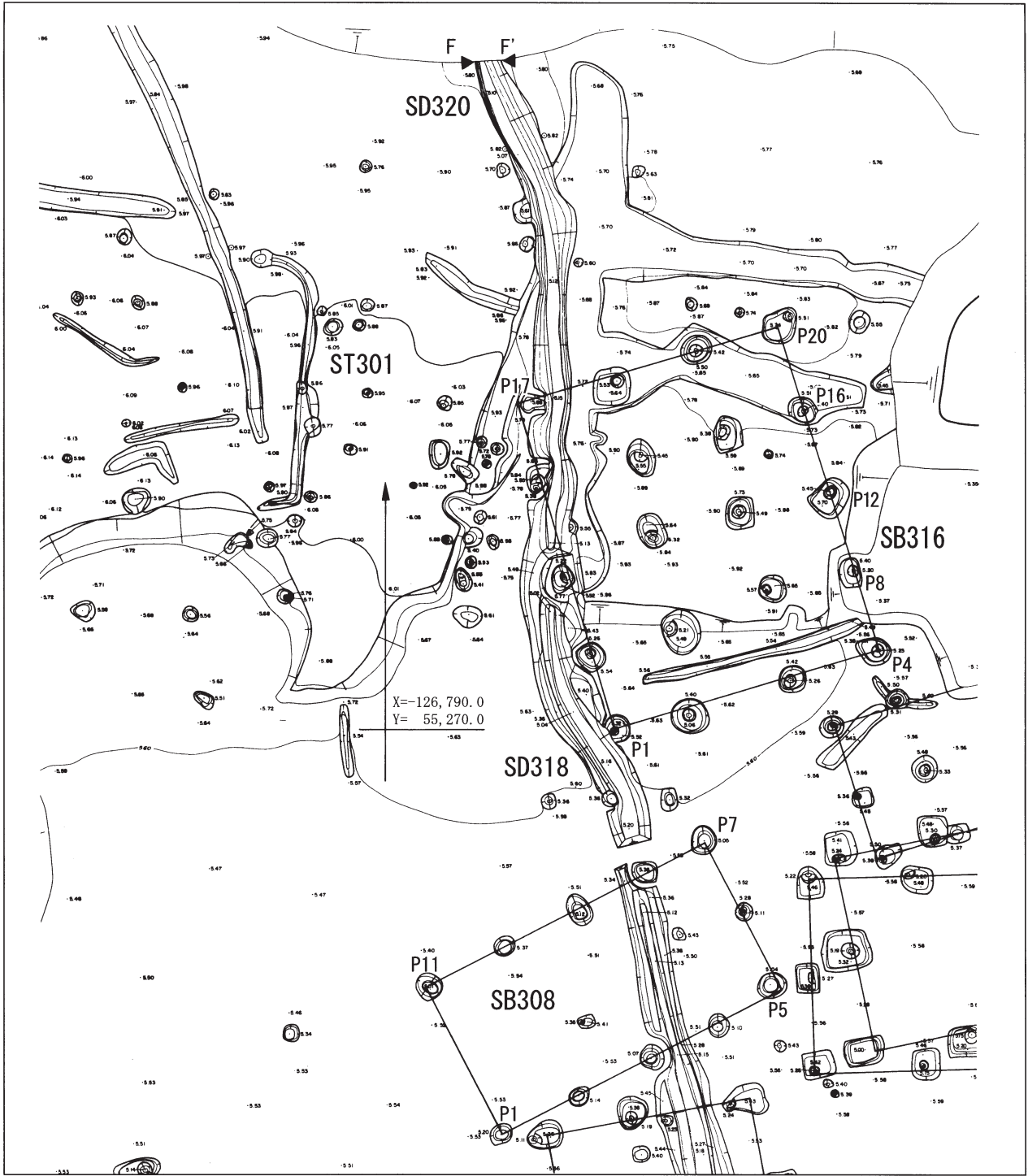
第13図 A区出土遺物実測図(1)(1/4)



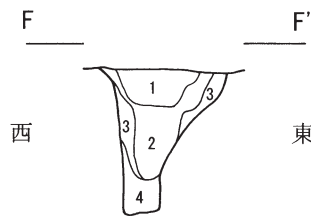
- SD312
1. 黄灰色粘質土. 2.5Y5/1
  2. 褐灰色粘質土. 10YR6/1
  3. 灰黄褐色粘質土. 10YR4/2
  - 地山 灰黄色粘質土. 2.5Y4/1

- SD312(北)
1. オリーブ黒色粘質土. 5Y3/2
  2. 灰オリーブ黒色土. 5Y4/2有機質含む
  3. 明黄褐色粘質土. 2.5Y6/8有機質含む
  4. 暗灰黄色粘質土. 2.5Y4/2有機質土多量に含む
  - 地山 黄色粘質土. 2.5Y8/8

第14図 SD312断面図(1/40)



第15図 SB308-316-ST301実測図(1/120)



- 1. 黒褐色粘質土. 2.5Y3/2
  - 2. 黄褐色粘質土. 10YR5/8
  - 3. 暗褐色粘質土. 10YR3/3炭化物やや含む
  - 4. 暗灰黄色粘質土. 2.5Y4/2砂レキ含む
- 地山 明黄褐色砂レキ土. 10YR6/8

第16図 SD320断面図(1/40)

SD315 SD312を切る延長6mの断片的な溝である。

SD316 SD312から派生してほぼ東に流れる溝である。SD318を切り、SD317には切られる。わずかに蛇行し、SB314・312に沿うように流れ、SB314の建て替えとみられるSB313のp1には切られている。層は暗灰色粘質土の単層で遺物も少ないため、SD312のバイパスとして掘られ短期間で廃絶したようである。

SD317 SB309・314・312で囲まれた広場を北から南へ10m流れ、西に向きを変えSB314の南妻をかすめるように9m流れ、さらに鍵の手に折れてSD312に流入する溝である。遺物等を多く含む。

出土遺物 須恵器坏蓋(51)は扁平な宝珠つまみを持ち、天井部は笠状に膨らみを持つ。須恵器坏(52)は丸底で、焼成は甘く、口縁の一部が被熱して黒化している。土師器甕(53)も出土。



写真22 SD318(北から)

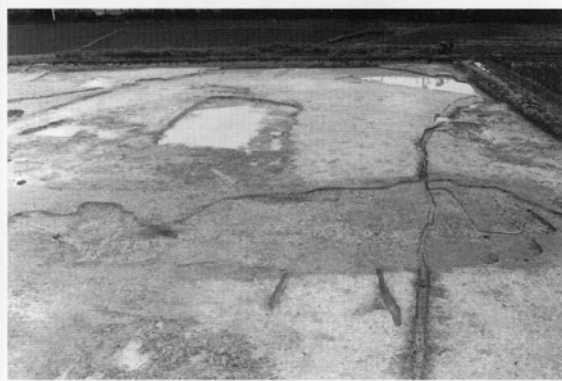


写真19 SD304・SX301検出状況(西から)



写真23 SK301(南から)



写真20 SD303・305(南から)



写真24 SK302(南から)



写真21 SD312(南から)



写真25 SK305・SE302(南から)



SD318 A区の北端から延長40mに渡ってほぼ直線的に連なる溝である。断面はV字状で深さも0.7m以上としっかり掘り込まれ、また1回以上の掘り直しが認められる。すべての掘立柱建物がこの溝の埋土を切って建てっており、これらより確実に古い遺構といえる。

出土遺物 須恵器坏蓋(54)～(56)は内面に返りの付くもの。(57)は返りが消失し、端部を小さな逆三角形に折り曲げる。須恵器坏身(58)は完形で出土。(59)は蓋坏の蓋を逆転させただけの形状。無高台の坏(60)は、大ぶりで、体部が深く、底面には窯壁片が付着する。有高台の坏(61)の高台は長く外反する。

## 土坑・井戸

SK301 SD301を切って掘られている、東西1.6m、南北1.3m、深さ0.9mの楕円形の土坑。埋土は黄灰色粘質土で3層に分かれる。中世の素掘り井戸の可能性が高い。

SK302 SD301を切る、北西-南東2.5m、北東-南西1.8m、深さ約0.1mの性格不明の方形土坑。



写真26 SK301(北から)

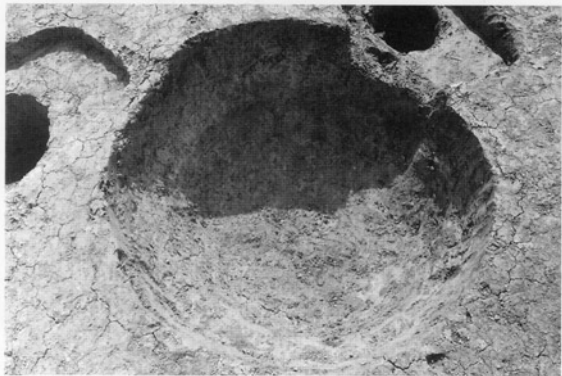


写真27 SK318(北から)

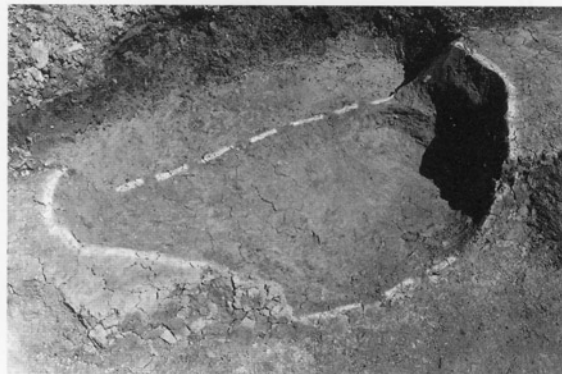


写真28 SK311(北から)

SK305・SE302 直径1.2m、深さ0.5mの二つの円形土坑が重複している。南側のSE302が新しい。遺物はほとんど含まない。

SK311 東西を近代の採掘土坑に切られているため正確な形は不明だが、一辺1.5m、深さ0.5mの方形土坑とみられる。埋土は黒色粘質土で遺物はほとんど含まない。井戸の可能性も考えられる。

SX301 多数の土坑が重なり合っている土坑群。SD304を切っている。深さは最も深い部分で0.5m、全体を覆う土坑は0.2m前後である。全体に古墳～奈良時代の遺物を含む黒色粘質土が堆積している。各土坑は不整形で、粘土採掘坑を廃棄土坑に転用したものか。

出土遺物 須恵器坏蓋(32)～(34)は内面に小さな返りが付く。須恵器坏身(35)(36)は最も小型のもの。無高台坏(37)は灰色で堅緻。(38)は器壁が極めて薄手で、口縁は外反する。須恵器高坏(39)の坏部は蓋坏の蓋を逆転したような形態。須恵器長径瓶(40)は頸部のみだが、緑灰色の自然釉がかかる。

SK318 直径1m、深さ約0.3mの円形土坑。SB307のp9を切る。須恵器片の出土が比較的多い。

SK319 南北1m、東西1.2m、深さ0.2mの長方形土坑。SB307のp12に切られる。埋土は単一の明黄褐色粘質土だが、底面全体を厚さ0.5cmの炭層が覆う。遺物の出土はみられない。

SE303 直径1.8m、深さ1.4m以上の近世の素掘り井戸。

SE304 東西0.9m、南北1.2m、深さ約0.3mの楕円形の土坑。SB307のp4に切られる。埋土は黒色粘質土の単一層、土坑とすべきか。

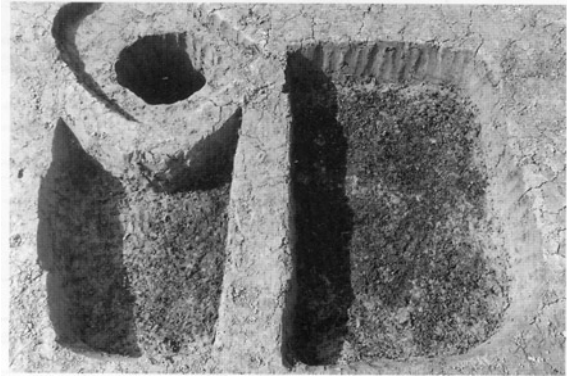
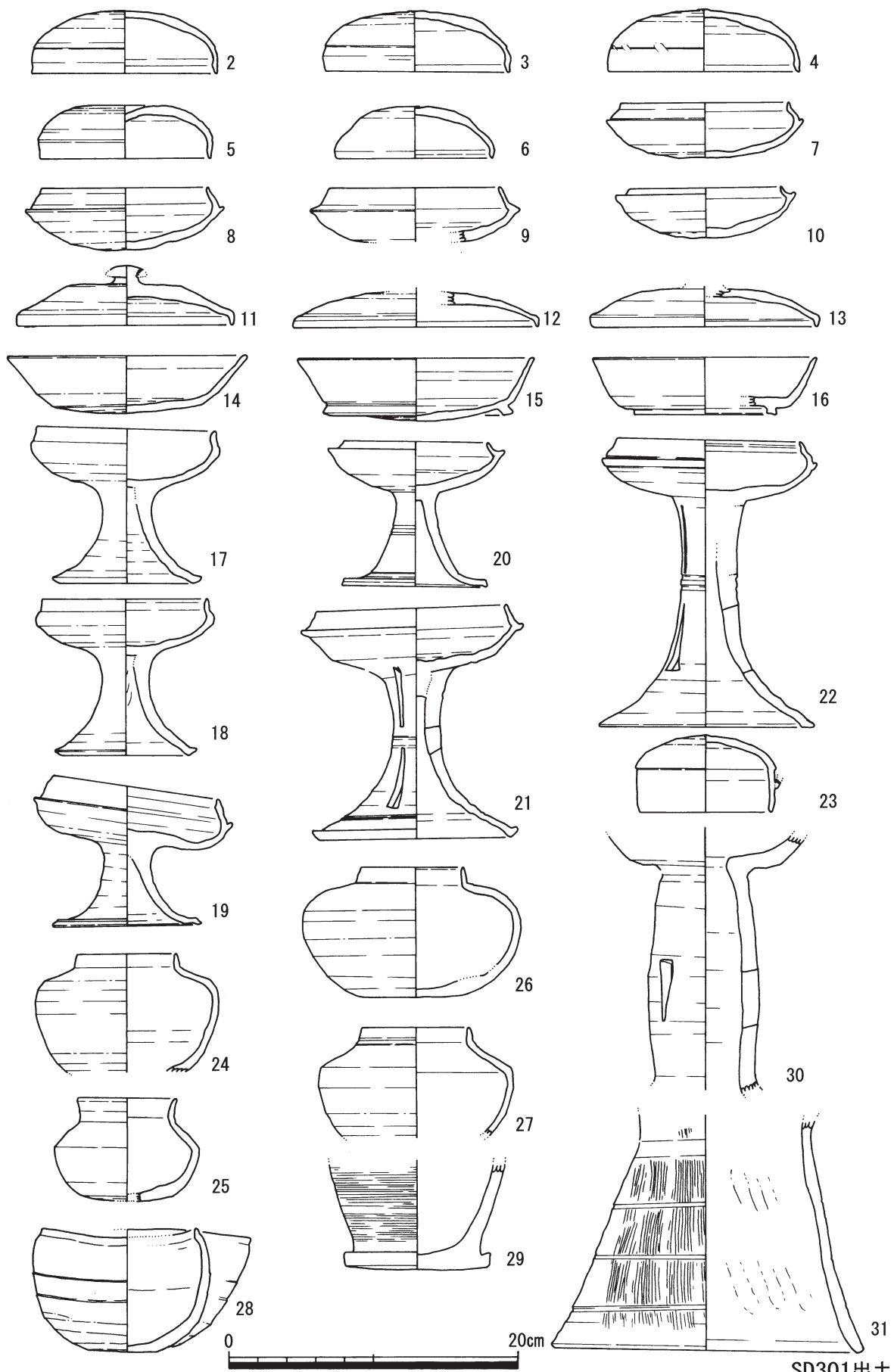


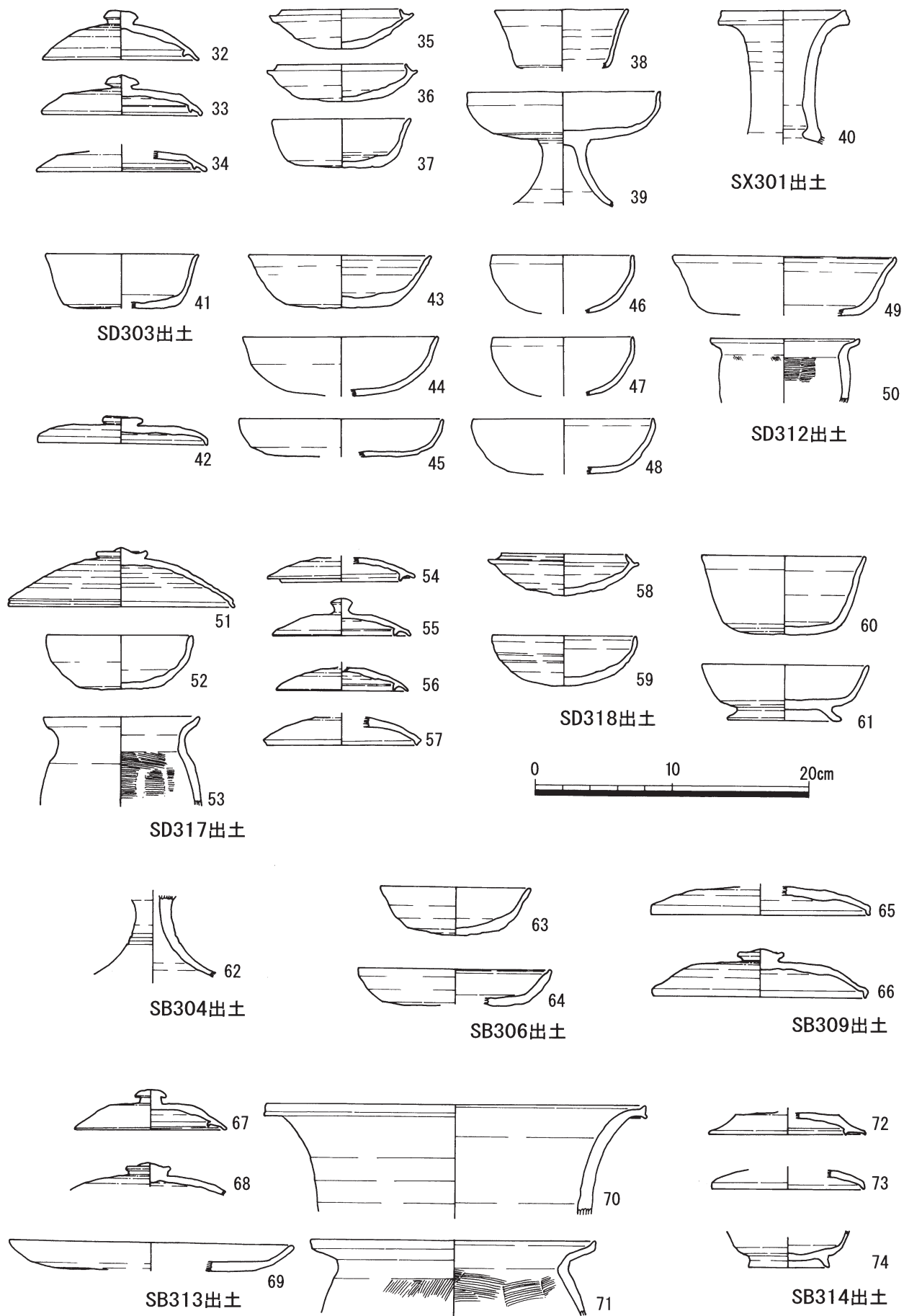
写真29 SK319(南から)



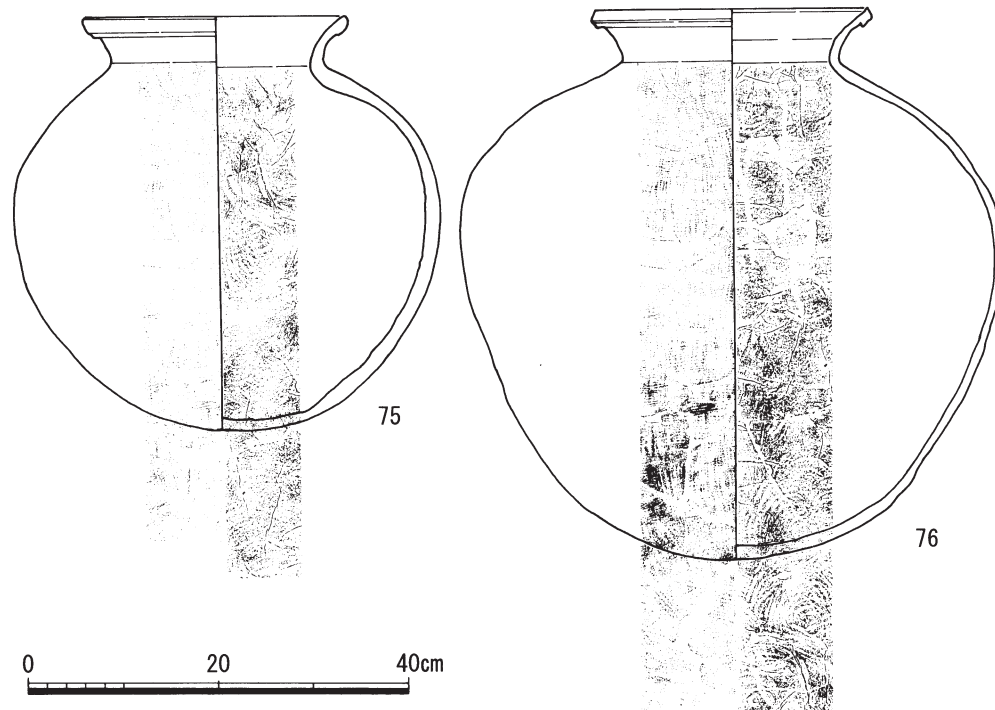
写真30 SE303(北から)



第17图 A区出土遗物实测图(2)(1/4)



第18图 A区出土遺物実測図(3)(1/4)



第19図 A区出土遺物実測図(4)(1/6)

## B区の調査 地層の堆積状況

B区はすでに述べたように、周囲の水田を造成した際の廃土を寄せてあり、その厚さは西側では1.4mを超える。この廃土を除去すると、オリーブ褐色砂質土の旧耕

作土を経て、遺構検出面となる基盤層の黄褐色粘質土層となる。検出面の標高はおよそ東側で5.9m、西側で6.2mであり、A区との比べ0.5m以上高い。

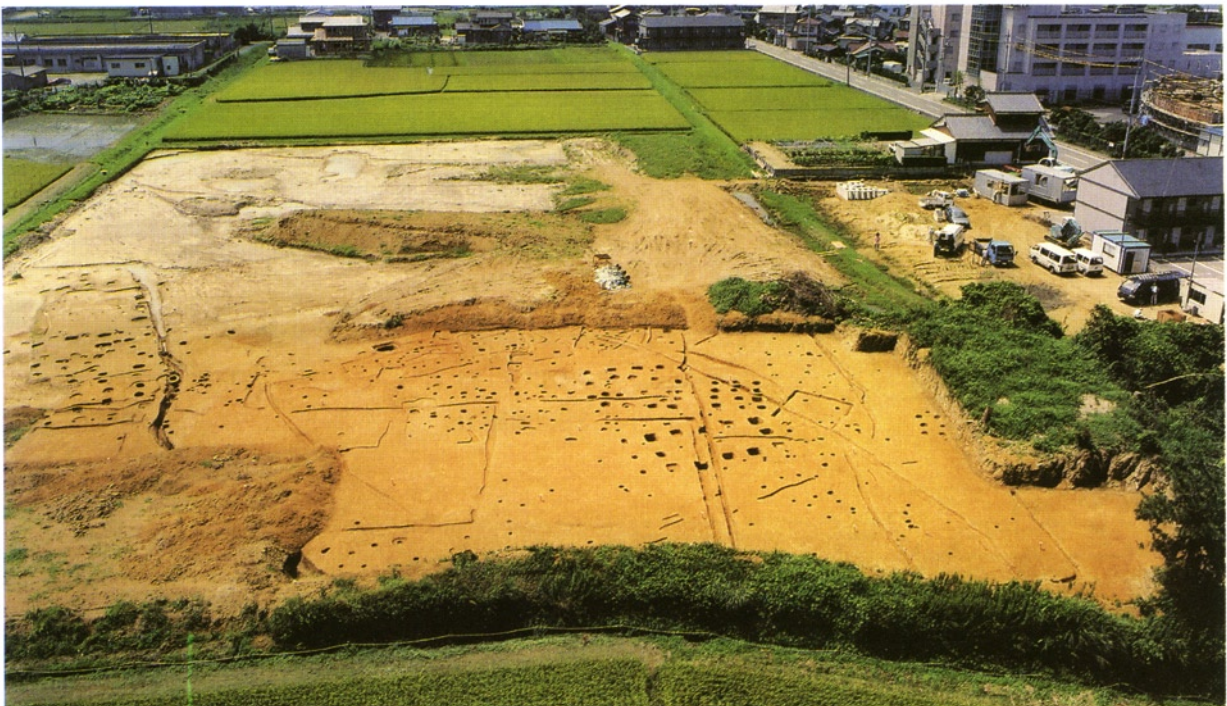


写真31 B調査区全景(北から)

## 主な遺構とその遺物

### 竪穴住居

ST301 幅約0.2mの北に開く「コ」字状の溝で、壁溝の一部と考えた。南辺は約5mである。溝内には炭化物が多い。



写真32 ST301(東から)

ST304 西側は他のST03等により切られ失われる。東西7.5m以上、南北3.3~3.9mの不整な長方形に壁溝状の溝が巡るが、支柱穴らしきものはみられない。また、類似の長方形構造を持つことで知られる大壁立ち建物に伴うような溝内の小ピットもみられなかった。判断に苦しむが、一応竪穴住居としておく。

ST305 ST304と同構造の遺構。ST304と切り合い関係を持つが、重複部が新しい土坑SK324によって失われているため新旧関係は不明。西側は同じく滅失している。東西5.8m以上、南北4.5mを測る。



写真33 ST303・306~310(北から)



写真34 ST311~313(西から)

ST306 西半をST303等に切られ、南側は削平されているため、北東コーナーのみが残存する。壁溝を持つ。

ST303 ST306・308・309およびST307を切っており重複する竪穴群の中で最も新しい。壁溝は検出できない。床には貼床の硬化面が確認され、4基の支柱穴が確認できる。北壁中央付近にカマドの痕跡とみられる焼土層が残る。南北5.3m以上、東西5.4mを測る。

出土遺物 須恵器高坏(79)は坏部中程に稜を持つ。

ST307 ST303の床面下に壁溝が検出され、ST303に先行する。一辺4.7mのほぼ正方形。支柱穴は南側の2基は確認できるが、北側のものはST303の支柱穴と重複している。ST303はST307を拡張する形で建て替えられたものとみられる。

ST308 ST303に切られて北西コーナーのみが残存する。壁溝を有する。

ST309 東側の大部分をST303に切られるが、床面下に壁溝が残っていた。東西4.1m、南北3.5m。支柱穴は4基とも確認できる。

ST310 ST308に切られ、また削平により南半は滅失している。ST312とも重複しているが重複部の残りが悪く切り合い関係は確認できなかった。南北4.2m以上、東西4.4m。北側2基の支柱穴は確認できる。

ST312 ST310と重複し、西半の大部分をST311に切られているが、ST311床面下に壁溝が確認できる。一辺約4.7m。

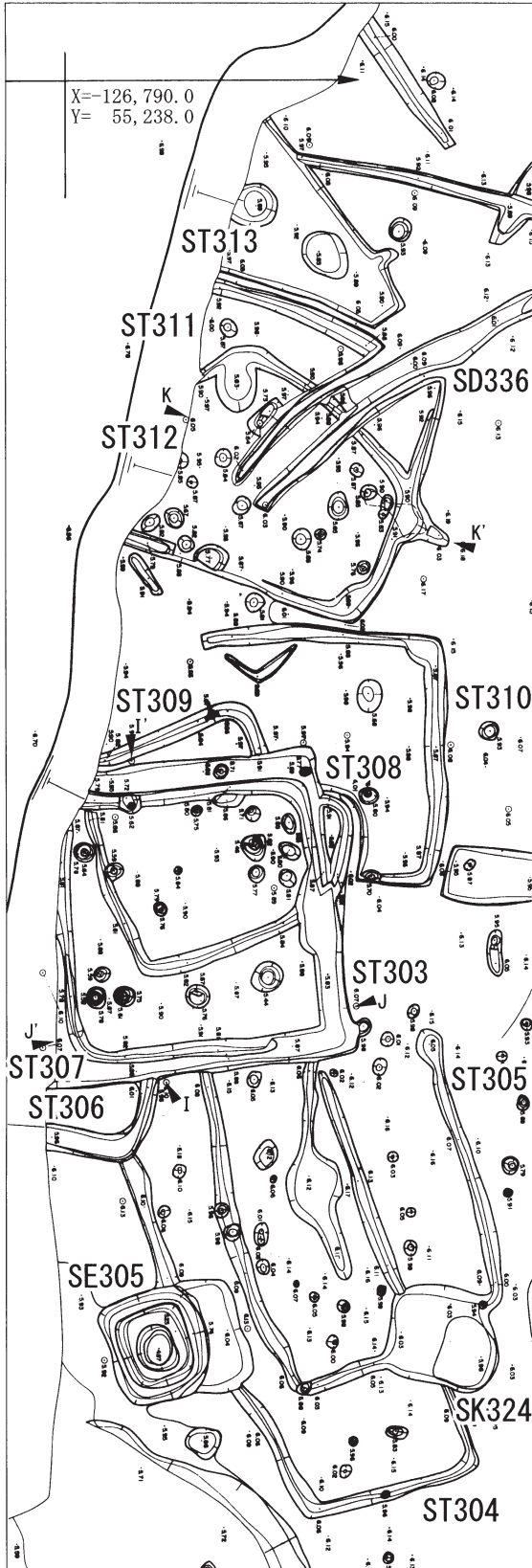
ST311 ST312・313を切っておりこの一群では新しいが、SD336に切られている。南壁は削平により滅失している。北壁中央にカマドの基底部および煙道部の一部が残る、支柱として用いられたとみられる土師器甕が倒置した状態で出土した。壁溝は全周するが、床面の残りが良いにもかかわらず支柱穴は明確でなかった。東西5m×南北4.4m以上。

出土遺物 いずれもカマド出土。須恵器坏身(80)は完形で出土。土師器甕(81)(82)はカマドに据えられた状態を留める、胎土は良好。

ST313 ST311に切られ、南半は削平により滅失している北西コーナーのみの検出である。壁溝はない。西壁にカマドの痕跡とみられる焼土が検出された。



写真35 ST311カマド(南から)

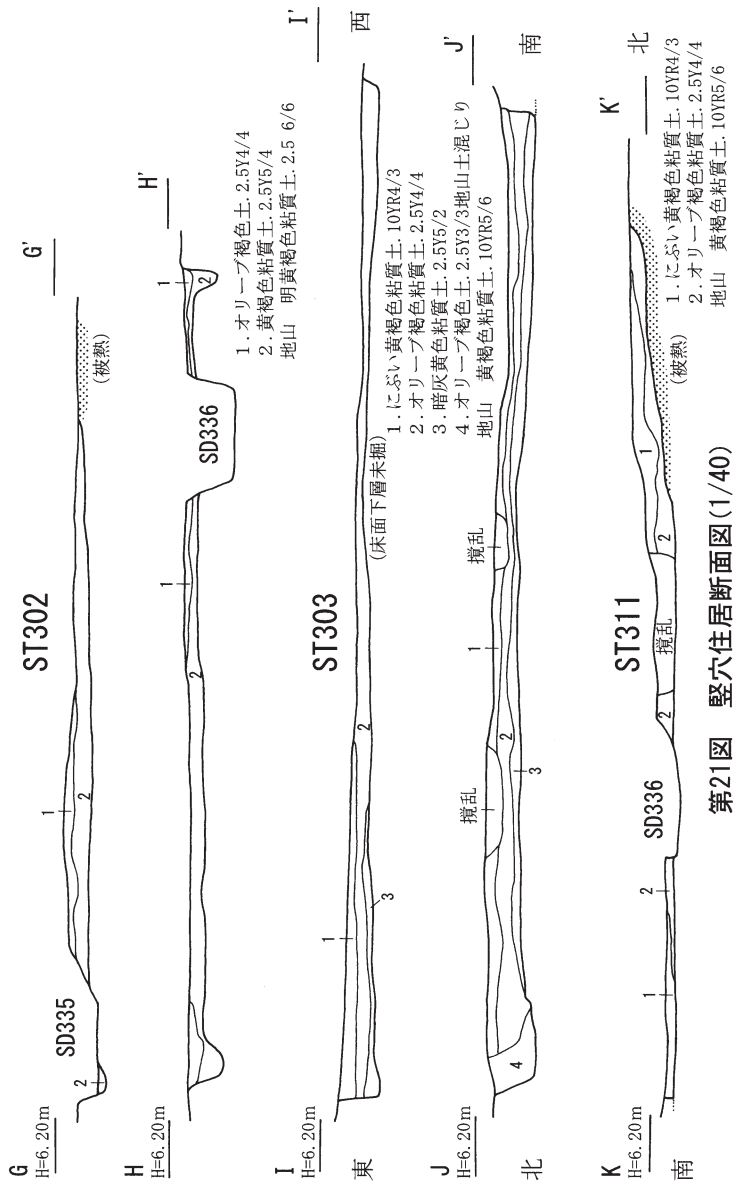


第20図 竪穴住居群実測図(1/120)

ST302 他の竪穴住居がB区の南辺に密集するのに対し1基のみ北に離れて位置する。主軸はN34°Wである。規模は北東-南西3.5m×北西-南東3mで、北西辺中央にカマドの痕跡が残る。支柱穴4基もはっきり残っている。SD336に切られる。



写真36 ST302(南から)



## 掘立柱建物

SB317 調査区西端で検出された。西半は調査区外であるが、東柱を持ち2間×2間の小型の倉庫とみられる。方位はN69°Wである。規模は東妻では2.4m弱で、柱間は桁行・梁行ともほぼ4尺とみられる。

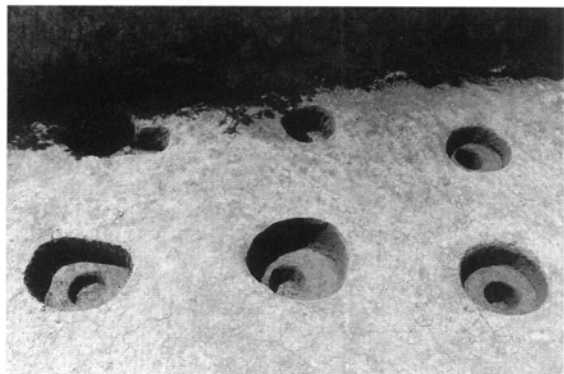


写真37 SB317(東から)

SB318 SB317から東に9.5m離れて建つ。SD306を切る。3間×2間の南北棟(N17°E)の建物で、東柱を持つ。規模は3.6m×2.6mで、桁行は柱間均等に4尺だが、梁行の柱間はばらつきがある。

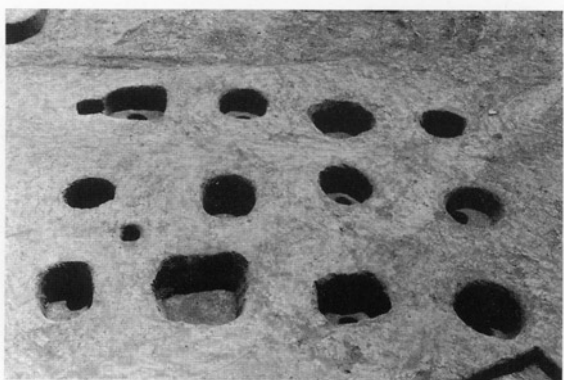


写真38 SB318(西から)

SB320 SB318から東に2.4m(8尺)の間隔を置いて建つ。SB321と重複する。3間×3間の東西棟(N73°W)の建物で、SB318と主軸を同じくし、両平をSB318の両妻と柱筋を揃えておりセット関係が明確である。規模は4.5m×3.6mで桁行は柱間5尺だが、梁行については不均等である。



写真39 SB320・321(西から)

SB321 SB320と重複して建つが、柱の切り合いが無く新旧関係は不明。4間×2間の東西棟(N84°W)の建物である。規模は6.5m×3.6mで、桁行は柱間5.5尺と推定されるがばらつきが大きく、梁行は柱間6尺である。

SB319 SB318・320から北に数m離れて所在する。4間×2間の身舎の東妻にのみ庇のような構造を持つ東西棟の建物である。身舎の規模はSB321とほぼ同じ6.5m×3.6mである。桁行は柱間5.5尺、梁行は柱間6尺である。庇の出は1.5mで5尺とみられる。B区の掘立柱建物の柱掘方が一辺0.5~0.6mであるのに対し、0.8~1mとかなり大きく、建物の方位も異なるのでやや時期が異なる可能性が考えられる。

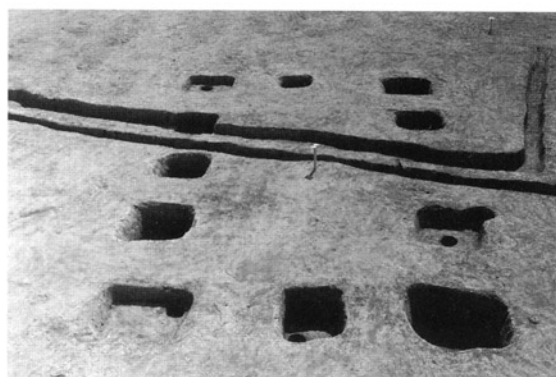


写真40 SB319(西から)



写真41 SD332(南から)

## その他の遺構 溝

SD332 ST302の北西に発して、ほぼ南北方向に走る溝。延長16mほど延びて、調査区南辺に達する。幅0.5m、検出面からの深さは0.1~0.3mを測る。

出土遺物 須恵器坏蓋(77)は天井部と口縁部の区別がない。須恵器坏身(78)は焼成が甘く軟質。

SD336 調査区北西部から緩やかに弧を描いて南東方向に走り、調査区南辺に達する。幅は0.5~0.75m、検出面からの深さは0.1~0.2m。堅穴住居ST302・311を切り、掘立柱建物SB318・321に切られていて、B区各遺構の年代を考える上での鍵となる。

SD325 調査北東端で延長4mが検出された。北西-南東方向に走る。幅1.4m、検出面からの深さは西側で0.5m、東側0.9mの二段掘りになっている。深さと方向からみてA区のSD320・318に連続すると推定できる。



写真42 SD326(南から)・ST302検出状況

SD327 SD325の西側に5mほど離れ、並行するように走る延長約17mの溝である。幅は最大で0.5m、深さは最深部が検出面から0.3mで、一部は浅くなり削平のため数ヶ所できれながらも、A区境界まで続き消失している。A区のSD320とはやや開いて6m間隔で並行する。

SD350 ST310に切られる比較的古い土坑状の溝。最大幅1m、延長3.2m。

SD324・326・333・334・335・337・339 これらは中世以降の畑の区画溝とみられる。



写真43 SD325(南から)

## 井戸

SE305 ST304を切って掘られている。南北2.2m×、東西1.9mの長方形掘方の南よりに、1.7m×1.9mの方形の掘方を設け、さらに1.2m×1.4mの掘方を設け、其の底部に0.6m×0.8mの楕円形の土坑が掘られている。検出面からの底面までの深さは約1.1mである。

## 土坑

SK324 一辺約1.7m、検出面からの深さ0.05mの方形土坑、ST304・305を切る。

SK325 南北5.5m、東西1.8m、検出面からの深さ0.05mの長楕円形の土坑。



写真44 SE305(南から)

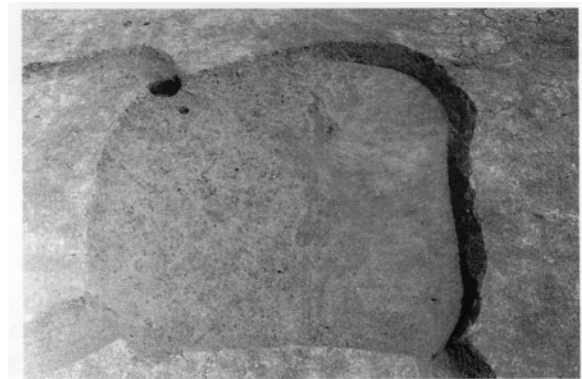
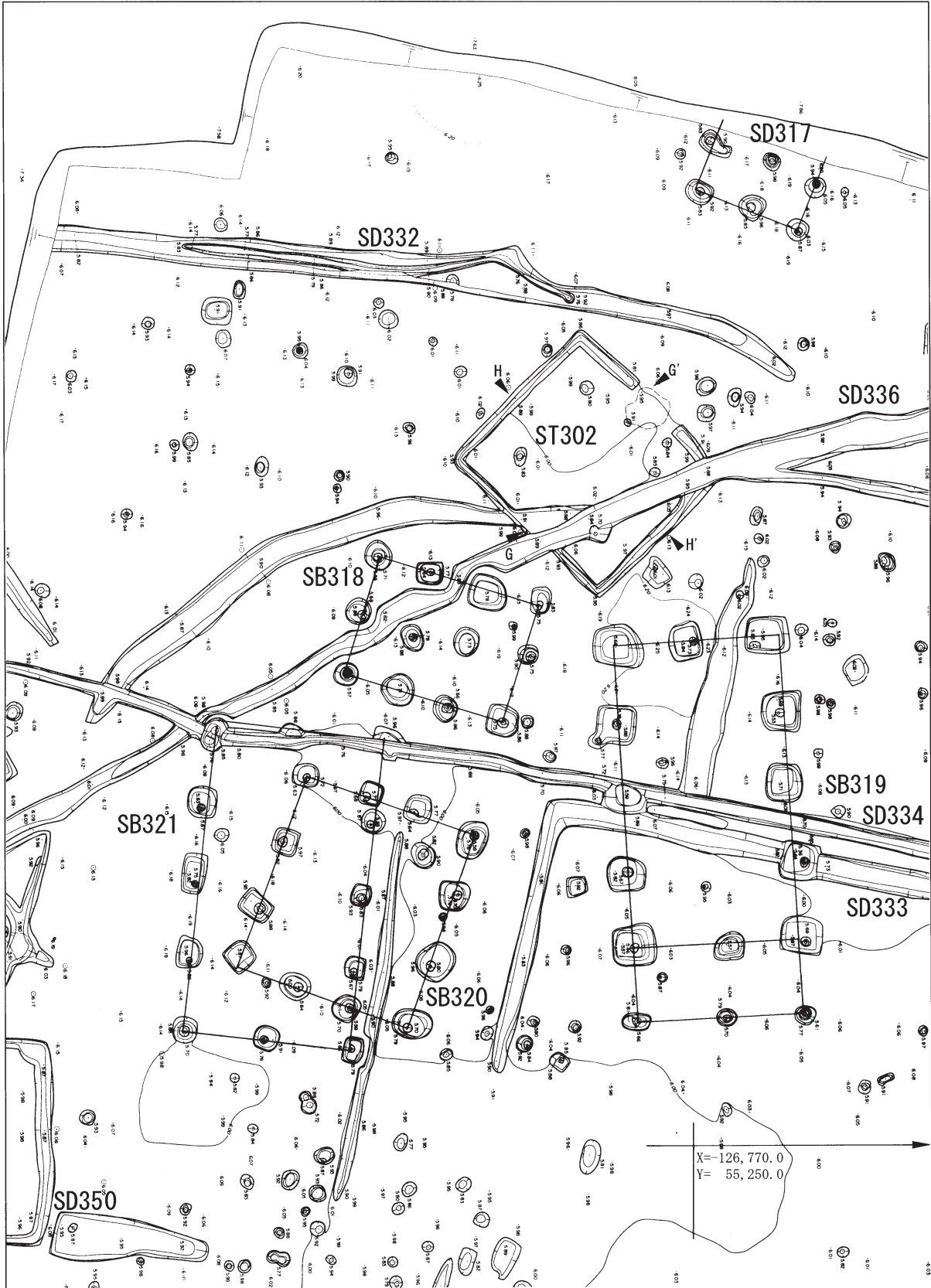


写真45 SK324(南から)

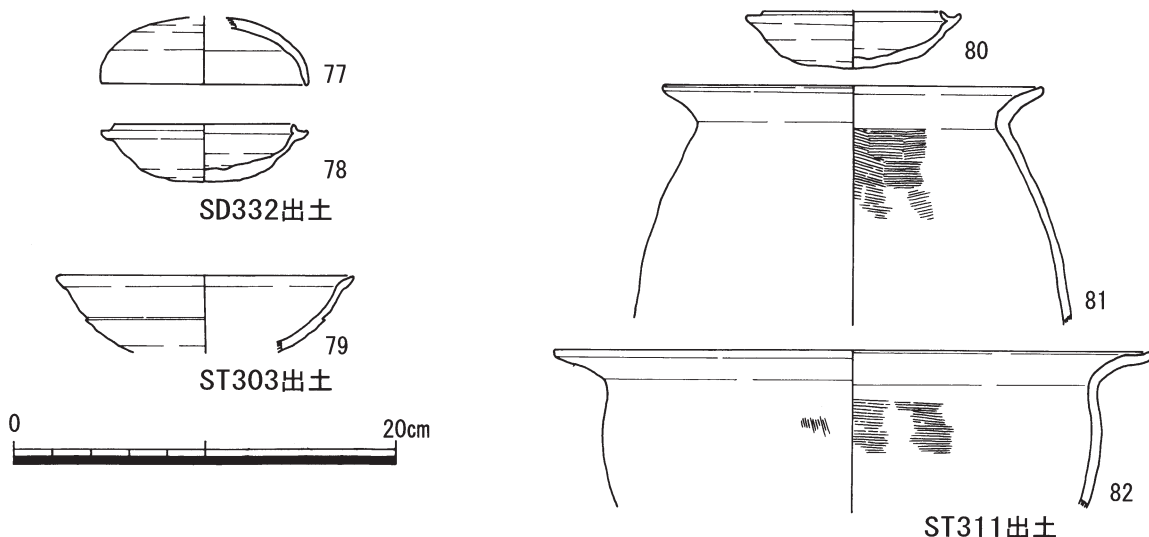


写真46 SD320(北から)





第22図 SB317~321・ST302実測図(東から)(1/120)

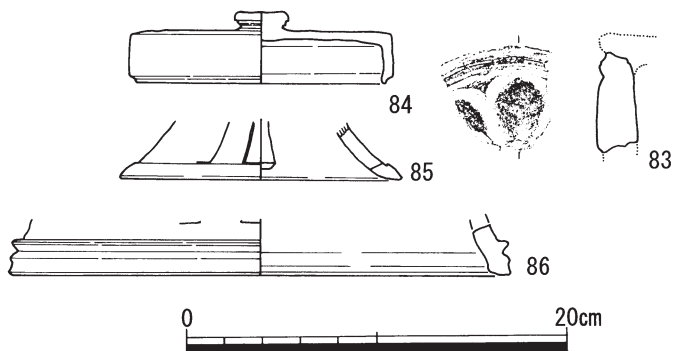


第23図 B区出土遺物実測図(1/4)

### その他の出土遺物

軒丸瓦(83)は、表土除去時にSX301の北側で発見。須恵質で極めて堅緻。蓮弁が1弁半分しか残っていないが、神戸高校が1点のみ所蔵する天王屋敷遺跡出土の軒丸瓦と同じ八葉素弁蓮華文軒丸瓦であろう。外縁は丸瓦部に接着していたとみられ、剥離面に布目圧痕が残る。須恵器薬壺蓋(84)は、SD301付近の表土除去時に採集された。

円面硯(85)(86)は、いずれも表土除去時の廃土中から採取された。(85)は硬質で、自然釉が付着する。(86)は白色軟質である。いずれも残存部が少なく十分な復元はできなかった。



第24図 その他遺物実測図(1/4)

須恵器	主な遺構の切り合い関係	
TK209 ~	ST310 ↓ ST308 ↓ ST309                      ST313 ↓                                      ↓ ST307                                  ST312 ↓                                      ↓ ST303                                  ST311                                  ST302	
	SD318(320)                                  SD336	
	↓    ↓ SB308—SB315—SB305—SB307                  SB318—SB320—SB317                  SB321—SB320	
	↓    ↓ SB310—SB311—SB314—SD316—SB306—SB304	
	↓    ↓ SB309                  SB312—SB313	
TK217 ~ TK48		
MT21 ~		

表1 主要遺構変遷表

## 4. 調査のまとめ

天王遺跡第3次調査では、掘立柱建物21棟、竪穴住居13棟をはじめ多数の溝、井戸、土坑等を検出した。ここでは、遺跡の性格を考える上で重要と思われる遺構を取上げまとめたい。

### 大溝

溝SD301は、調査区南東隅をよぎるのみであるため全貌は不明である。しかし、底部の幅4m弱を測り、検出面からの深さも1mと規模が大きい。直線的で、掘り方がほぼ垂直、底面が平らなため自然流路ではなく人為的に掘られたものであろう。

出土須恵器からみて古墳時代後期、遅くとも6世紀後半に開削されていたであろう。同時期の遺物のみが出土する下層2は黒色粘質土が発達して、当時は常時水が溜まっている状況であったとみられる。須恵器器台や滑石製紡錘車などがみられ、完形に近い個体が出土していることも注目される。

掘削当時の規模からみて、一般集落の用排水路とは考えにくい。段丘を横断して金沢川と田古知川を結ぶ、あるいは金沢川から段丘内部の天王屋敷遺跡を結び物資の運搬に利用された運河の機能を担っていたと考えている。しかし、集落の中核部分の周囲に巡らされた環濠、または豪族居館の濠ではとする意見もあり、これも捨てがたい。今後の周辺地域における新たな調査が待たれる。

その後、北側に大形掘立柱建物群が営まれる奈良時代前半頃までは皿状に掘り直されて溝として機能していた。再上層からは山茶碗片等も出土し、最終的な埋没は平安時代末以降である。

### 竪穴住居と掘立柱建物

竪穴住居はB調査区のみで検出された。ST303・ST311を含む竪穴住居群は同一箇所複雑に切り合い、少なくとも4回の建て替えを行っている。出土した須恵器坏身により最も新しいST311は7世紀初頭に位置付けられる。すると、最初に建てられたST313やST310の年代は6世紀中葉近くまで遡ると推測できる。

竪穴住居群の北側にはSB318・SB320およびSB319・SB321のように2棟程度で組をなす掘立柱建物が存在する。溝SD336との切り合い関係から竪穴住居よりも新しいことが確認できる。おそらく7世紀代の前半頃に、住居が竪穴住居から掘立柱建物に転換していったことを示している。

A調査区にも目を向けると、調査区の西辺付近にSB301及びSB302・SB303というように、南北にほぼ一定間隔で1～2棟の組を成す掘立柱建物群が分布している。おそらく、これがB調査区の掘立柱建物同様に一般的な家族の居住単位を示すものであろう。A調査区はかなり強い削平を受けており、おそらくこれら掘立柱建物の周囲にもB調査区同様、先行する竪穴住居が多く分布していたであろうことが推定される。

### 南北溝

A調査区の北半からB調査区にかけて溝SD318(320)・SD325とSD327が幅5～6mの間隔をおいてほぼ並行して

いる。SD327はA・B区の境で削平され一旦途絶えるが、延長線を追うとSD312(305)へと無理なく続く。また、SD318もSD316と交わり終わるようにもみえるが、同じく延長上に痕跡的に残るSD314が存在する。

調査時点ではこの並行する2条の溝を側溝とみし、道路の遺構と考えた。しかし、路盤は検出されず、調査指導では否定的な見解が出された。道路でないとするれば、この平行する溝はSD318を、西側に移設して新たにSD327を開削したことによって生じたと考えざるを得ない。後に述べる大型掘立柱建物群は、SD318を埋め立てた後に建てられている。おそらく、これら大型掘立柱建物群の建設に際して、敷地を確保するために溝を西に移動したものであろう。SD318埋土からはかえり付の須恵器蓋が出土し埋められた年代は7世紀前半～中葉とみられる。

大形掘立柱建物群の一部が旧SD318のラインに柱列を重ね合わせるように建てられ、また掘立柱建物SB304・306の方位とSD312の関係を見れば、一連の掘立柱建物群がこれらの溝の走向をかなり意識し影響を受けている。これらの溝が、単なる排水の用だけでなく土地の境界あるいは区画として重要な意味を持っていたことが推定される。

SD318(320)から西に約20m程離れ、ほぼ同じ走向を示すSD336が存在する。SD336はB調査区での竪穴住居から掘立柱建物へ転換する画期に掘られている。両溝の同時併存を仮定すれば、表に示すとおりA・B両調査区の遺構の新旧関係が明確になるが、残念ながらSD336がA調査区にどのように延びるかを確認できず確証するには至らない。

### 大形掘立柱建物群

A調査区東側で検出された大形掘立柱建物群は、今回の調査で最も注目すべき遺構である。その前段階には、企画的に配置されたSB315・SB305・SB307といった小形の掘立柱倉庫群が存在したことも考慮に入れておく必要があるだろう。

大形の掘り方を持つ南北棟のSB314は、東側の東西棟のSB310、SB311とともにコの字型の配置を構成する。SB314が正殿、SB310、SB311が脇殿にあたり、地方官衙政庁風の配置とみてとれる。また、正殿にあたるSB314の南側には柱間8間と一般集落では見ない長大なSB306と、SB304が直列に配置されている。更に、北側には4間×3間と倉庫と見るには立派すぎる総柱建物SB316が建つ。

そして、注目すべき点としてこれらSB314、SB310、SB311は火災により焼失した後にも、やや位置をずらして同配置でSB313、SB312、SB309として再建されていて、この位置と配置が極めて重要な意味を持っていたことが推定される。

年代的には、SD318が埋められた後に、小形倉庫群の一段階を経るため、7世紀後半代以降とみられる。また、再建されたSB313、SB312、SB309の柱掘り方からはかえりの消失した須恵器坏蓋が出土するのに対し、当初のSB314、SB310、SB311の掘り方からは出土しない点で、焼失・再建の時期を7世紀末以降と考えることが出来る。

さて、この他にあまり例を見ない建物群からなる施設の性格だが、大形の掘立柱建物の密集、官衙風の企画的な配置に対して、柱の掘り方の規模が貧弱さ、建物の主軸や柱筋が整然と揃わない点、さらに南面せず方位に対するこだわりの無さといった相反する特性をもつ点が注目される。

その性格を考える上では、近年活発に行われている郷家を巡る議論が参考になる。そこでは郡衙以下のレベルながら一般集落とはかけ離れたこれらの施設について、末端地方官衙としての郷家(衙)遺構の存在を積極的に位置づけようとする見解に対し、それを否定的に検証しながらも地方末端支配機構のありかたを整理・再構築していくと動く方向がうかがえる。基本的には、遺構のあり方に応じて郡衙の出先施設あるいは郡司・郷長クラスの居宅の可能性が想定され、後者にも末端行政の実務機構としての属性を認めていくとするものである。

天王遺跡の場合、郡衙の出先施設とすれば、金沢川河口の入り江を利用した伊勢湾交易を管理する津の施設が考えられる。または海浜の郷に置かれた郡衙または正倉の別院に付属する施設の可能性も考えられる。私的なものとしては、隣接する天王屋敷遺跡に白鳳寺院が建立さ

れていることから、その造営主体となった郡司・郷長クラスの有力豪族の居宅自体である可能性も高い。それならば、まさに律令制度の権威を取り入れたミニ官衙居宅であったと言える。さらには、居宅に伴う家政機関もしくは寺院の運営の中核となるような院、たとえば政所院や物資の管理を行う倉院にあたる施設といった推定も可能であろうが、地方豪族のものとしては規模が大きすぎるくらいがある。

硯の破片が包含層から2点出土しているものの、墨書土器等の文字資料が全く出土せず、遺跡の性格を決める手がかりに欠けるのは、誠に残念なことである。

#### 【参考文献】

- 仲見秀雄他『鈴鹿市史』第1巻 鈴鹿市教育委員会 1980
- 『日本考古学協会1995年度大会研究発表要旨』 日本考古学協会 1995
- 広瀬和雄「考古学から見た古代の村落」『岩波講座日本通史』第3巻 岩波書店 1994
- 山中敏史「古代地方官衙論」『考古学研究会40周年記念論集 展望 考古学』 考古学研究会 1995
- 杉立正徳「天王遺跡発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報IV』 鈴鹿市教育委員会 1996
- 杉立正徳「天王遺跡(第2次)発掘調査報告」『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報IV』 鈴鹿市教育委員会 1996
- 山中敏史他『研究集会「律令国家の地方末端支配機構をめぐって」発表要旨と参考資料』 奈良国立文化財研究所 1996

## Summary

The Tenno Site is located in Kishioka-cho, Suzuka-city, Mie prefecture. It is a compound where features and artifacts are dated back from the Yayori era to the medieval period. Due to its location adjacent to the Tenno Site, it was thought that the compound was the site where ancient local clans lived. The site is located at the tip of the lower grade terrace on the right back end of the Suzuka River and about one kilometer inland from Isewan Bay.

An excavation was conducted as preparation for residential land development from April 1997 to August 1997.

As a result of the excavation, twenty-one embedded-pillar buildings, thirteen pit-dwellings, many ditches, wells, and earthen pits, etc. were found on the site.

In the eastern part of the land where the excavation was conducted, a group of large embedded-pillar buildings, which were constructed with careful planning sometime in the first half of the Nara era, were found.

The location of three main buildings that include county office and office center is especially noticeable, as the arrangement of the three buildings forms a "U-shape" or a square with one side missing. The three buildings were once destroyed by fire and rebuilt in the same arrangement. However, the buildings were smaller in size and not well balanced in appearance. Since the buildings did not face south, it seems that the buildings were lower in rank than such important buildings as the county office. It could be possible that the rebuilt buildings were constructed as a local branch of the county office, residence of a local baronial family or important facilities for storing commodities.

In the western part of the land, there are a group of buildings that include several pit-dwellings and a couple of embedded-pillar buildings that were built sometime between the Kofun Era and the Asuka Era. The site was a part of residential area. It is recognized that switching pit-dwellings to embedded-pillar buildings was under way around that time.

In the southeast part of the land, a large-sized ditch was found. The ditch is about four meters in width and one meter in depth. From the lower layer, many pottery pieces were unearthed as well. Due to the shape of the ditch, there are two theories for the use of the ditch. One theory is that it was used as a channel or it was possibly a divider of the land for the local clan's mansion.



写真47 SD301出土遺物

番号は実測図番号

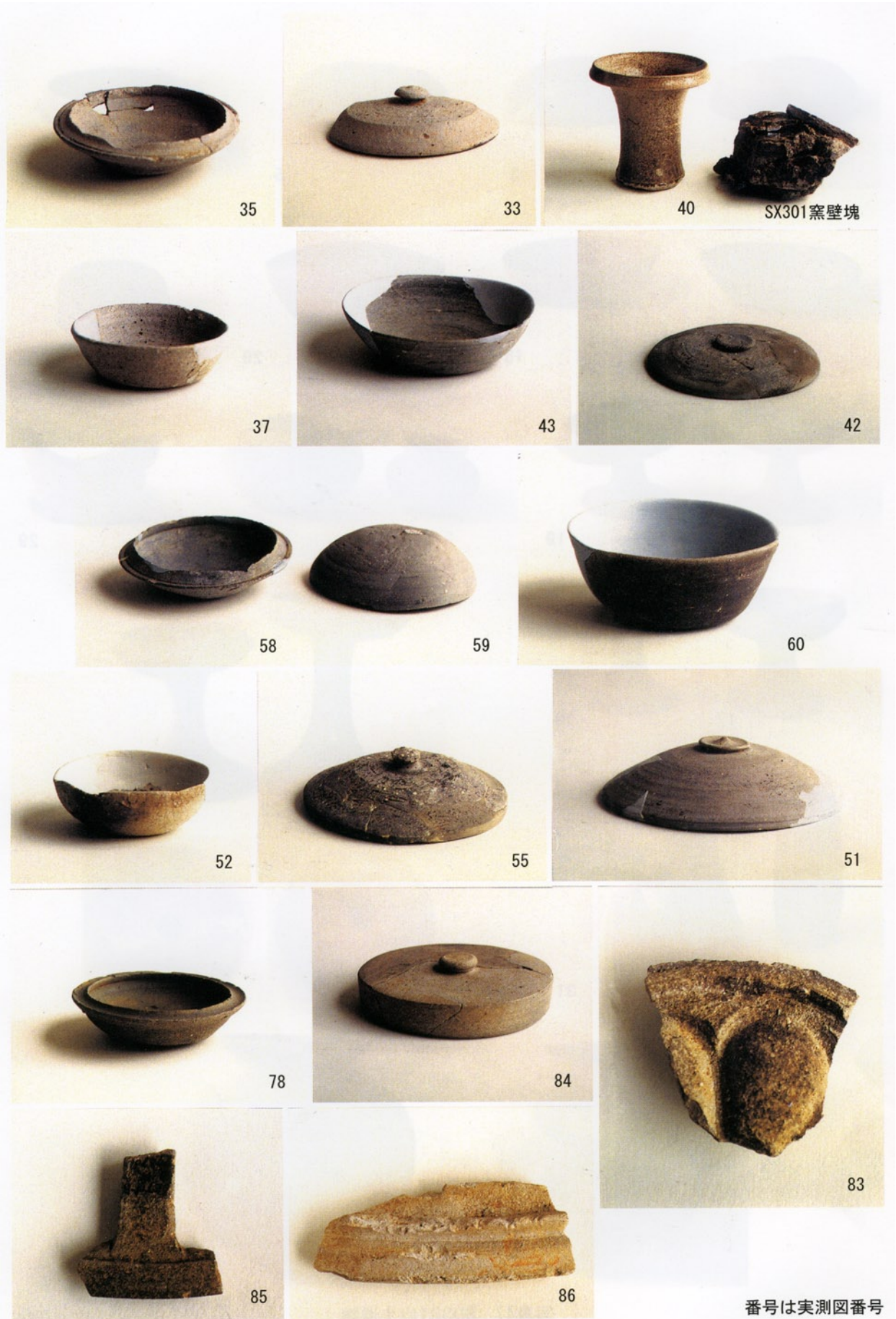
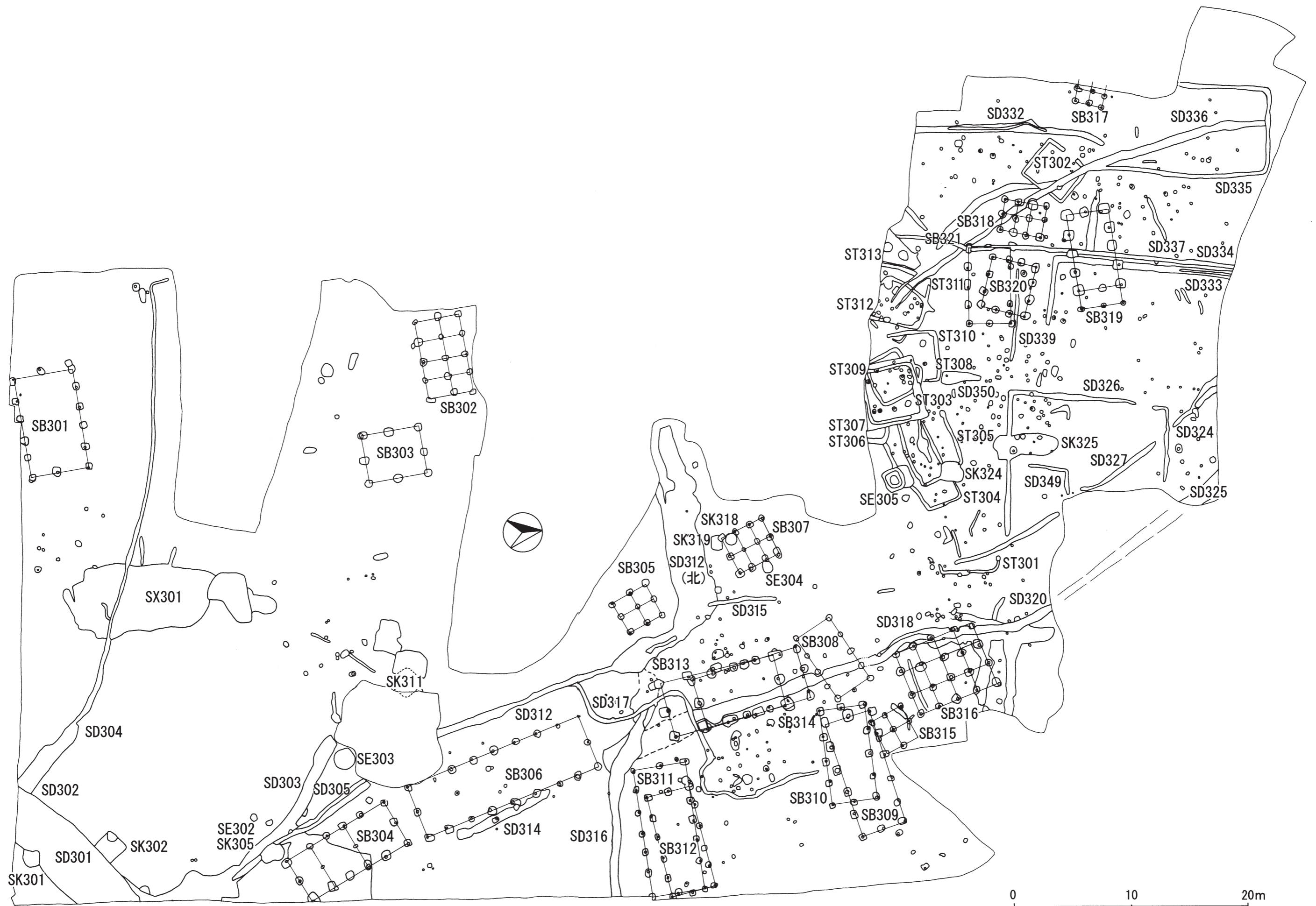


写真48 その他遺構出土遺物



付図 天王遺跡 第3次調査遺構配置図(1:300)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	てんのういせき だい3じちょうさほうこく							
書名	天王遺跡－第3次調査報告－							
編著者名	ふしわら ひでき 藤原 秀樹							
編集機関	鈴鹿市教育委員会							
所在地	〒513-0801 三重県鈴鹿市神戸九丁目11-15 TEL0593(82)9031							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんのういせき 天王遺跡	みえけんすずかし 三重県鈴鹿市 きしおかちょう 岸岡町  868番地の3・4 3132番地の24・ 26・27・29・30・31・ 32・35・37・45	24207	873	34° 51' 21"	136° 36' 14"	19970404 ) 19970811	4,980㎡	宅地造成
	集落・官衙?	古墳～奈良	溝・竪穴住居・掘立柱建物・土坑・井戸	土師器・須恵器 滑石製紡錘車・軒丸瓦・瓦・硯	運河または堀と思われる古墳時代後期の大溝 官衙の出先施設または豪族住宅とみられる大型掘立柱建物群			

天王遺跡  
－第3次調査報告－  
1998年3月  
編集発行 鈴鹿市教育委員会  
〒513-0801 三重県鈴鹿市神戸九丁目11-1  
印刷 早川印刷株式会社



# Tenno Site 3rd Excavation Report

Suzuka city, Mie Pref., Japan

March,1998

Suzuka City Board of Education